

ひまわり 向日葵とアンパンマン

日米を結ぶ「原爆」探究の旅・23年目のゴールイン



立命館大学国際平和交流セミナー 編

2018年3月

目 次

第 1 章 「原爆」探究の旅、23 年目のゴールイン	1
第 2 章 アンパンマンに助けられた「最後の旅」	7
第 3 章 学生と教員をつなぐ S C 集団の歩み	29
第 4 章 23 回目の夏——これが私のハイライト	37
第 5 章 若い世代へ —— 継承への願い	47
第 6 章 教訓と展望	55
資料集	63

第1章 「原爆」探究の旅、23年目のゴールイン

本書の目的

原爆投下 50 周年を記念して、立命館大学共通教育センターとアメリカン大学（以下 A U と略）教養学部歴史学科付属「核問題研究所」との間に始められた「日米を結ぶ原爆探究の旅」（立命側の正式名称は「国際平和交流セミナー・広島長崎プログラム」、A U 側は「核の歴史——広島・長崎を超えて」）は、その後 23 年間、毎年 8 月 1 日から 10 日頃にかけて、一度の中断もなく行われました。

残念ながら立命側が共催するかたちでのプログラムは、今回（2017 年度）をもって休止（または終結）することとなります。当初から担当してきた立命館の教員（藤岡惇）が退職しますが、後任の担当者を見出すことが難しかったからです。

プログラムの発足 20 周年の 2014 年度に、すでに私たちは『日米交流で原爆を探究する旅 20 年の歩み』という報告書を公にしています。その後 3 回の旅を実践するなかで、新たな経験を積み、新しい到達点を築くことができました。最後の実践となった 2017 年度の旅に焦点を当て、ホットな経験を伝えるとともに、23 年間に及ぶ「日米を結ぶ原爆探究の旅」の光と影の両面における教訓を探っておきたいと思います。

23 年間の参加者の推移と総数

23 年間の参加者数の推移を示す表を見てください。『20 年の歩み』報告書で示したように、1995～2014 年の 20 年間の立命側の参加者数は 277 名（A P U＝立命館アジア太平洋大学からの 45 名を含む）、A U など海外からの参加者数は 267 名（乗松聡子さんが引率したカナダからの参加者 21 名を含む）でした。この数字に教員と S C（Student Coordinator：過年度参加学生から選ばれる学生リーダー＝学生調整者の略）を加えると、参加者総数は 675 名になる、というのが 3 年前の到達点でした。その後 2015－2017 年に 3 回の旅を行うことで、新たに立命側からは 40 名（A P U からの 12 名を含む）、A U からは 53 名の参加者を迎えることができました。

23 年間を通しての参加者数をグループごとに見ておきましょう。

参加者数の推移

西 暦	立 命 から 応 募 した 学生数	立 命 から 合 格・参加できた 人数 () は A P U 参加者数で 内数。	A U な ど 海 外 からの 参 加 者 数 (引率 者含む)	教 員・S C を 含 む 参 加 者 数	G S も 含 ん だ 参 加 者 総 数。 その年の特徴点
1995 ～ 2014 年の 合計数	543	277 (45)	267	675	別に 2011 年以降に、52 名の G S 関係学生が部分参 加してきた。

2015 年	40	15 (4)	26	50	AU参加数は史上 2 位。 GS とプログラムの完全合 同化。10 名の GS を含むと 総参加者数は 60 名。
2016 年	38	12 (5)	18	39	7 名の GS を含むと総参 加者数は 46 名。
2017 年	31	13 (3)	9	31	乗松聡子さんの不参加で 通訳力不足危機に直面。11 名の GS を含むと総参加者 数は 42 名。
1995 ～ 2017 年の 総計	652	317 (57)	320	795	80 名の GS を含むと総参 加者数は 875 名。

旅行団のなかの第 1 グループは、立命からの受講学生たちです。このプログラムの履修を希望した立命生は、23 年間に 652 名を数えました。そのうち 317 名が平均 2・1 倍の競争率を突破して、旅行に参加することができました。

立命側 317 名のうち 18%にあたる 57 名が、大分県別府市より参加する APU（立命館アジア太平洋大学）の学生たちでした。篤志家の寄付を得て APU の国際学生には 2－3 万円の奨学金を付けていた時期があり、APU 参加者の半分近くは国際学生でした。おかげで原爆探究の旅に、アジアの若者の視点が入ってきました。

第 2 のグループは、AU を窓口にして米国内外からやってくる学生たちです。この間に日本（立命）側を上回る 320 名の学生が、ピーターや乗松聡子さん（カナダ・バンクーバー）に引率されて日本にやってきました。AU の正規学生のばあい、11 泊の宿泊費、滞在経費、往復航空運賃だけでなく、3 単位の単位認定費用も加算されるので、80 万円程度を AU 当局に支払わねばなりません。単位取得を求めない非正規学生のばあいでも 60 万円程度の負担が必要となります。立命生のばあいは、6－7 万円ですむわけですから、10 倍の費用がかかってくるわけです。23 年間に AU 関係者が負担した費用総額は 2 億円を下らないのではないかと思います。このような負担をいわず広島・長崎の地を訪問・調査しようとする外国人たちが 320 名もいたことは、勇気づけられる事実です。とともに彼らを勧誘し、引率してきたピーターたちの情熱と行動力には脱帽するほかありません。

参加者が 8 名に達しないばあい、旅の催行を中止するというルールが AU にはあります。8 名に達しそうになく、催行中止の危機に見舞われた年が、過去に少なくとも 6 回ありました。そのたびに乗松聡子さんたちにも支援され、ピーターが超人的な努力を行い、篤志家から寄付を集め、奨学金を用意するといった非常措置も講じて、何とか最低ラインを突破してきました。プログラム開始から 3 年目の 1997 年には、応募不足から AU 側が参加中止を決定し、立命の単独実施という変則事態となりましたが、訪日旅行の中止をこの年 1 回だけにとどめてきたのは、ピーターの偉業だと思います。

旅行団を構成する第 3 のグループは、教職員スタッフと立命の過年度参加学生から募る学生コーディネイター（SC）集団です。毎年、教職員スタッフは 4－5 名、SC 集団は 5

名程度、合わせると 9・10 名となります。

以上 3 グループから国際平和セミナーの参加者は成り立っており、23 年間の合計数は 795 名となります。

G S や支援グループを含めた総数

これとは別に 2011 年以降、立命館大学国際関係学部内の英語で学ぶ課程＝グローバル・スタディーズ（略称 G S）コースでも、「被爆地を旅する平和セミナー」（G S セミナー）が始まりました。当初は、私たちのプログラムとは別物でしたが、次第に相乗りを希望されるようになり、15 年以降は、宿舎も旅程もプログラム内容もほぼ同一にして、実施されるようになりました。

5 年間 G S セミナーを担当してきた山根和代先生が 15 年度末に退職され、16 年からは国際関係学部赴任直後のクロス京子先生が G S セミナーの担当者に就かれました。G S セミナーは 7－13 名の規模ですので、合同すると、旅行団の規模は 50 名程度に膨れ上がり、旅行団の運営には難しい面が生まれます。しかし他方、英語力の優れた教員・学生が旅行団に加わってくれるので、プラスになるという側面もあります。

7 年の間に G S セミナーから参加した学生は 80 名です。G S セミナーを加えたばあい、旅の参加者総数は 875 名に増えます。

そのほか旅行団の外周には、講師、被爆証言者、通訳ボランティアとして、支援していただいた方々、過去に参加した O B ・ O G、随時・交流を希望される支援者やファンの方々がいます。旅の途中で随時、彼らと再会し、交流・交歓することになります。彼らも含めたばあい、担い手の総数は 950 名程度になるでしょう。ただし講師・被爆証言者や学生リーダー（S C）、支援者たちにはリピーターが多く、実数でカウントしたばあい、900 名程度に収まるのではないかと思います。

2 度目の原爆展を開いた 2015 年

被爆 70 周年を迎えた 2015 年は、平和交流セミナーの担当者が藤岡から君島東彦教授（国際関係学部）に交代した年ですが、広島・長崎の 2 つの原爆記念資料館に「原爆の図丸木美術館」が加わり、1995 年以来 2 度目の原爆展を A U で開催した年でもありました。

2013 年以降毎年、丸木美術館理事長の小寺隆幸さん夫妻が私たちの旅に同行されていたのですが、そのなかで丸木位里・俊夫妻の描いた連作絵画「原爆の図」を A U で展示できないかというアイデアが生まれ、実現に向けて動き出しました。丸木美術館の「原爆の図」6 点だけでなく、広島・長崎の両資料館の被爆遺品も A U に送り、広島・長崎・丸木の 3 資料（美術）館共同開催による総合的な原爆展を再び A U で行おうという構想に発展しました。こうして被爆 70 周年を記念した二度目の原爆展が A U 美術館を会場とし、2 カ月を越える会期（6 月 13 日－8 月 16 日）で行われました。20 年前と比べると規模の点でも会期の点でも、ずっと大規模となったわけです。原爆展の開幕式の模様を伝える資料—1 を参照してください。

前年（2014 年）の 8 月 4 日、私たちのために被爆証言をしていただいた山本定男さんがこんどは A U を訪問され、原爆展開催を記念して被爆体験を証言されました（資料—2 を参照）。山本さんは、私たちの宿舎（東横イン新幹線口）の西側に広がる東練兵場にあった

学校園のサツマイモ畑で草取りをしていた時に、被爆されましたが、爆心地から2.5キロ離れていたため、生き残ります。他方、広島第2中学の同級生のほとんどは、爆心地近くで建物取り壊し作業に従事していたため即死したそうです（山本さんの被爆体験は、『20年の歩み』93ページ以下を参照）。被爆死した山本さんの級友たちの遺体は、広島赤十字病院の玄関の花壇の上に「向日葵のような形」で並べられていたと、今年の被爆証言で河野きよみさんが証言されました。本書表紙の写真を参照してください。不思議な縁を感じます。

この年、原爆展の開催が世界的に注目を集めたこともあり、AUが派遣する平和の旅参加者は26名と大きく増え、プログラム史上第2位となりました。因みに来日学生数のピークは、被爆60周年の2005年の27名でした。

この年の旅行団は、プログラム史上最大の60名に膨れ上がり、担当者もSCグループも大変だったようです。1回生で参加し、2回生・3回生の時には、SCとして旅を支えた田中志穂さんが、この年のSCの苦労と喜びとを率直に語っています（資料—3参照）。

15年の旅の終了後に、君島教授が国際関係学部長に選出されたため、16年度の担当ができなくなり、後任探しに四苦八苦。やむなく定年をすぎた藤岡が、ピンチヒッターとして再登場することになりました。

オバマ大統領が広島を訪問した2016年

16年度はバラック・オバマさんが、米国大統領として、初めて被爆地広島を訪問したこともあり、米国でも被爆地への関心が高まり、AUからの参加者は18名という高い水準を維持できました。立命からの参加者は12名（うちAPUから5名）、GSセミナーが7名、教員・SCが9名という構成となり、参加者は5か国から46名と平均的な規模に戻りました。8月2日の立命での近藤紘子さんの講演が、日経新聞に載っています（資料—4）

広島では、サダコの折り鶴で知られる佐々木禎子さんの兄の雅弘さんから講演していただいた後に（資料—5）、平和式典に参列しました。オバマ大統領の広島訪問をどう評価するかをめぐって、AU生が意見を聴かれることの多い年でした（資料—6・7・8参照）。

長崎では長崎大学核兵器廃絶研究センターの中村桂子准教授から核軍拡の現状をどう見るのかについて、大変分かりやすい説明をうけ（資料—9参照）、翌日には中村先生の好意で、長崎市を訪問していたキム・ウォンス国連事務次長（軍縮問題上級代表）を囲む討論会に全員で参加し、核軍縮の展望について、軍縮問題分野の国連トップと深い議論を展開できました。とくにAU生が鋭い質問を飛ばしていたことが印象に残っています（資料—10・11参照）。

長崎での被爆式典の直後、「被爆者の店」（長崎被災協）の地階会議室で、日本被団協事務局長の田中熙己さん、3人の事務局次長と交流会を行いました（資料—12）。「ノーベル平和賞を日本被団協へ」という運動の中心人物であるピーターやAUにたいする被団協側の期待の高さをひしひしと感じた交流会でした。

重大な事故なしに休止・終結へ

最終回となった2017年の旅の詳細については、次章を見てください。

私たちの活動は、無視できない波紋を世界に広げてきたと思います。私たちの旅が糸口

となるかたちで、AUでは被爆の実相を伝える証言集会が数多く開かれましたし、2013年にはアカデミー賞受賞の映画監督オリバー・ストーンをピーターが旅の特別講師として招きました。オリバー・ストーン監督の被爆地での発言や私たちのセミナーでの講演は、世界中に広く報道されました。

セミナー参加者が軸の一つとなり、ピーターが顧問となるかたちで、AUでは核問題を探究する学生サークルが活動していますし、日本・中国・韓国・米国の学生からなる平和を学ぶサークルも結成されたそうです。(資料—13)。

ともあれ 23 年間一度の中断もなく、毎年 10—12 日の旅程で、本プログラムは開催されました。ピーターと藤岡とは 230 日間、ピーター・藤岡・近藤紘子さんの 3 人は 180 日間、ピーター・藤岡・紘子・乗松聡子さんの 4 人は 100 日間ほど、一緒に旅行し、寝食と苦楽とを共にしてきました。

その間に色々なハプニングや事故が起きました。旅行中に学生が急病になり、入院したことが何回かありました。最終日に韓国からの復員兵が泥酔のあげく救急車で搬送される事件も起きました。迷子になった人、部屋に閉じこもった人、危険物を持ち歩いた人もいれば、ホテルの窓や扉を壊して弁償金を支払った人もいました。原子力潜水艦の搭乗生活に戻った軍人もいました。人間関係の摩擦から緊張が走ったり、列車に乗り遅れたり、台風接近や豪雨のため日程変更を強いられたこともありました。

波風体験と言いますか、修羅場の真剣勝負こそが人を大きく発達させる原動力だといわれます。とはいえ 23 年の間に一件の重大事故も発生せず、「平和探究の巡礼者団」900 人のメンバー全員が、それぞれ無事に帰国・帰還できたことに安堵しています。(藤岡 惇)



第2章 アンパンマンに助けられた「最後の旅」

1) 冒頭から困難に直面

お世話になった3人を失う

2017年、わたしたち旅行団は、3人の恩人を失いました。まず4月7日に「岡まさはる記念長崎平和資料館」理事長の高實康稔さん(77歳)を失いました。「平和の旅」が始まったのと同じ1995年、JR長崎駅の山手側の中華料理店を買収・改造して、日本の戦争責任を正面から問う資料館が開設されます。高實さんは、長崎大学教授時代の退職金と年金をつぎ込んで、この平和資料館を支えてきた人(資料—14)。追悼集会には、バンクーバーから乗松聡子さんが来日され、参加されました。「岡まさはる」のような資料館を広島に作りたいというのが乗松さんの夢だそうです。

旅行が終わった8月30日には、長崎の原爆で背中一面に大やけどを負いながら、命のかぎり核兵器廃絶を訴え続けてきた谷口すみてるさん(88歳)が亡くなりました(資料—15)。長崎原爆被災者協議会長を務めた谷口さんは、私たちのため被災協の会議室を長年無料で貸していただいただけでなく、体調の許す限り、被爆証言に立たれました。

3日後の9月2日には、長崎の核廃絶・平和運動を理論的に主導してきた元長崎大学学長の土山秀夫さんが、92歳で逝かれました。土山さんは、1995年6月にAUで開かれた原爆展に当時の広島市長の平岡敬さんとともに参加され、2001年には私たち旅行団にむけて、講演されています(資料—16)。

2つの困難に直面

本プログラム最後の年——2017年には2つの困難が発生し、事態打開のために知恵を絞ることになりました。

第一は、AU側の応募者不足です。直前まで応募者は6名。このままではAU側の来日キャンセルもありうる。1997年に次いで20年ぶりにキャンセルが発生するかもしれないという緊張が走りました。AU当局に承認されなければあい、少人数でもいいので、ピーターが私的に引率する「自主ゼミ」という形にしてでも、来日できないかと打診したこともあります。自主ゼミにすれば、米国の学生の負担コストは半減するのですから、検討に値する案だと思うのですが、いかがでしょうか。

今一つ、通訳不在の危機が発生しました。これまで10年間連続で、通訳の役割を果たしてきた乗松聡子さんが参加できなくなったのです。専門的な通訳者を雇うだけの予算はありません。学生同士の日常会話程度はなんとかありますが、専門家の講演や被爆者の証言を英語で表現するのがスタッフでは難しく、頭を抱えました。11年前のあの綱渡り状態への逆戻りを覚悟しなければならないのか？ 悪夢が甦ってきました。

参加者数

開催の2週間前に、応募者が催行の最低ラインの8名に達したという吉報が届きました。

もと大学教師で 80 歳の Rosemarie さんが、養女の Anisha さんに付き添われ、AU の「学生」として来日することになったのです。しかし脚が相当悪いとのこと。見学先で車椅子を貸してもらえるかどうかの検討に SC は入りました。

私たち国際平和交流セミナーのばあい、応募者 31 名のなかから 13 名（立命から 10 名、APU から 3 名）が選抜されました。GS（今年から Peace Studies Seminar と改称されましたが、無用の混乱を避けるため、旧名の GS で通します）からは 11 名、合計で 24 名が立命から参加することになりました。日米合わせると学生総数は 32 名です。教員層 4 名（クロス、藤岡、近藤紘子、ピーター）に SC 5 名を加えると、旅行団の総数は 41 名となることが確定しました。

ボランティア通訳の登場

学生同士の日常会話については、①外国人も早く日本語を修得し、できるだけ日本語で会話してもらおう。②それが無理なばあい、相手が英語力の点で小学 1 年生レベルであることを前提し、小学 1 年生でも理解できるよう、ゆっくりと平易に語る。③GS の学生など英語の得意な参加者が増えているので、彼らに助けてもらおう、といった方策で乗り切る方針を立てました。

過去 25 回も日本に来ているのですから、とくにピーターには①と②のルール of 厳守を誓ってもらいました。ただし①の日本語での会話能力をテストしたところ、未だ日本語能力は、5 秒くらいしか会話が續かない惨めなレベルだということが判明しました。とはいえ②の点では、かなりの改善の成果があったと思います。

講演者については、①通訳を自己調達できる人、②日英両方の言語で講演できる人優先的に依頼することとしました。

とはいえ質疑を交わし、討論を深めていくには、一定レベル以上の通訳者が不可欠となります。見るに見かねてクロス先生がまず「アンパンマン」に変身し、本来の任務ではないにせよ、ボランティア通訳の役割まで担われるようになりました。

京都プログラムが始まった日に、ボランティア通訳をしてもよいという学生が、突然、自費で別府からやって来ました。APU 4 回生の石原光夏さんで、去年の参加者です。彼女は、京都から広島に至る 7 日間、「助っ人 SC」として、私たちに同行し、無償で通訳を引き受けてくれたのです。2 人目の「アンパンマン」の登場です。旅行団のなかから第 3、第 4 のアンパンマンが多彩に誕生する「呼び水」の役割を彼女が果してくれたのです。

長崎では、クロス先生が通訳としてさらなる活躍をされ、石原さんの抜けた「穴」を埋められました。

2) 具体化された教育目標

国際平和交流科目の各プログラムには、共通した目標があります。「担当教員のガイドの下で旅をし、戦争と平和を考えるうえで重要な現場に身をさらすという国際的な体験学習を通して、世界平和の構築と国際理解・協力の道を探る」というものです。この共通点を踏まえたうえで、広島長崎プログラムは、つぎのような目標を掲げました。以下、2017 年

度のRUの「シラバス（履修案内）」から引用します。

被爆の実相に触れ、核惨事の原因と防止策を世界の学生たちと語り合う

今から 22 年前の 1995 年のこと。広島・長崎への原爆投下 50 周年を記念して、米国の首都ワシントンにあるスミソニアン航空宇宙博物館が原爆展を企画したところ、米国各界の批判を浴び、中止されるという事件が起きました。①広島・長崎への原爆投下は正しかったのか。②核戦争の実相とは何か。③世界平和を維持するうえで、核兵器は抑止力として有用なのかをめぐって、米国民とアジアの人々、日本人、そして被爆者の間には、深刻な認識ギャップがあることが浮かび上がったのです。

ちょうど同じ時期、同じワシントンにあるアメリカン大学では、被爆 2 世の日本人留学生（直野章子さん）とピーター・カズニック准教授とが「広島学習の夏期講座」を計画していました。この夏期講座が軸となって、広島市長をはじめ、多数の被爆者を招き、アメリカン大学でスミソニアンに代わる原爆展が開かれました。また被爆 50 周年記念式典には、多数のアメリカン大生が広島にやってきました。これら一連の出来事が、このプログラムを始めるきっかけとなり、その後毎年、両大学関係者が共同で本プログラムを企画・実施してきました。

その後 22 年がたちましたが、核をめぐる情勢は、いっそう混沌とした様相を呈しています。一方では、オバマ大統領の広島訪問があり、今春からは核兵器を違法化する条約の制定会議が国連で開かれます。他方では、核兵器は東アジアや中東・中央アジアの地に拡散し、宇宙衛星や原発を標的とした軍事攻撃の動きが強まっていますし、トランプ政権の誕生ともあいまって、米ロ中の首脳とも、核軍拡競争を再開する姿勢を鮮明にしているからです。

このような情勢を念頭において、23 回目のプログラムを開催します。今年は、アメリカン大学を窓口に関外からは 15 名が参加する予定ですので、立命関係の受講生数は 15 名（アジア太平洋大学の学生 4 名ほどを含む）とします。別に 5 名の過年度の参加学生が、リーダー役として同行し、経験の伝承と実務を担ってくれます。アメリカン大学で原爆投下を研究してきた歴史学者のピーター・カズニック教授、経済学部藤岡惇特任教授が旅行団を引率します。

近藤絃子さんといえばアメリカン大学の卒業生で、昨年広島演説のなかでオバマ大統領が言及した 2 人の被爆者のうちの 1 人とされています。彼女にも、全日程同行してもらい、72 年前に被爆者がさまよった道と建物の跡をたどり、被爆の実相と核戦争の意味を探ります。

また国際関係学部のクロス京子准教授が「英語で学ぶコース」の学生を引率して、同一の日程で旅行されるので、適宜合流し、8 月 6 日と 9 日の被爆式典に参列し、多数の被爆者や核問題の専門家と交流します。

受講生の到達目標

今年は南京事件から 80 年、日本国憲法施行から 70 年目の年です。日本国憲法の前文には「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」と書かれていますが、「北朝鮮や韓国・中国の『公正と信義』に信頼などできるの

か。「隣国に侮られ、尖閣・竹島と、領土を奪われるだけでないか」。「米軍とともに戦争ができる国に変えておいたほうが、結果的に日本の權益も平和も守れるのではないか」という意見の人が増えています。3つの被爆地――ヒロシマ・ナガサキ・フクシマをかかえる日本の地を旅するなかで、世界の若者とともに、「核の時代の戦争とは何か」「戦争で平和が創れるのか」、「平和を創造し、核兵器をお払い箱にすることは可能なのか、望ましいのか」について考えます。

旅のなかで、議論し、解明したいのは、つぎのような問題群です。①米国はなぜ2発の原爆を立て続けに庶民居住地域の上に投下したのか、②原爆投下を招いた日本側の「侵略」戦争責任をどう考えたらよいのか、③原爆雲の下で何が起こったのか、④「核の時代」とは何か、原子力発電をどう評価したらよいのか、⑤北東アジアにおける憎悪と戦争の悪循環を克服し、67年も続く朝鮮戦争を終結させ、米国と中国の覇権争いの暴発を防ぐことは可能か、⑥「核なき世界」を実現することは可能か、どうすれば実現できるか。

外国の若者との交流を通じて、臆せずに英語で会話ができる力量を高めるとともに、心のつながる友人をつくることも重要な目標とします。日本国内では会えないような多様な魅力的な人たちと出会い、人間関係をぐっと広げる機会にしてください。

「原爆投下は、対日戦争を早く終わらせるための必要悪であった」という通説は誤っている。そうではなく、ポツダム宣言の条項を操作することで日本の降伏時期を引き延ばし、対ソ威嚇と情報収集のため原爆を投下するまでは日本の降伏を許さなかったのだ」とする映画を、米国側引率者のカズニック教授は、著名な映画監督のオリバー・ストーンさんとともに制作し、世界的に大きな反響を呼びました。彼の主張についても鵜呑みにせず、原爆投下の真実を探究する機会にしてほしいと思います。

3)「募集要項」の作成と広報

シラバスを具体化した今年の『募集要項』を4月中旬に公表し、受講生募集に活用しました。今年の募集要項は次のようなものでした。

募集人数：15名（APUから参加の4名程度を含む）

現地研修の期間：8月1日（火）～8月10日（木）の9泊10日

事前研修：衣笠とAPUをテレビ回線でつなぎ、第1回は5月27日（土）、第2回は6月10日（土）、第3回は7月9日（日）の午後3時からを予定。

事後研修：10月7日（土）の午後3時からを予定。

費用：55,000円（広島・長崎までの片道交通費、宿泊代、バス代など）

担当教員：藤岡 惇（経済学部特任教授）

随行教員：ピーター・カズニック（アメリカン大学歴史学教授・核問題研究所長）

随行する被爆者：近藤紘子（アメリカン大学卒、広島流川教会の谷本清牧師の長女）

シラバス作成後の変化を中心に、何点か補足することとします。

（1）アメリカン大学を窓口にして、15名ほどの学生が7月31日に来日し、立命館大

学衣笠セミナーハウスに4泊します。8月1日朝には立命館アジア太平洋大学の学生たちが別府からやってきます。また国際関係学部のクロス京子准教授の指導する英語科目(Peace Study Seminar)の学生たちも、同一ホテルに泊まり、同じ日程で旅行しますので、行動をともにします。北米出身にとどまらず、アジア出身の国際学生も参加しますので、多彩な民族集団からなる理想的な旅行団コミュニティが出来上がるでしょう。

(2) 宿泊所が内定しました。8月1日から4日朝までは、金閣寺の裏にある「立命館大学衣笠セミナーハウス」。4日夕から7日朝までは、広島駅新幹線口から北へ徒歩5分の「東横イン新幹線口」。7日夕から10日朝までは、長崎の爆心地から南へ徒歩15分の「アルファイン長崎」に泊まります。広島はツインベッド(一部はシングル)の部屋、長崎はシングルベッドの部屋に滞在し、朝食がつきます。

(3) 本プログラムは、旅行社が組織する「パック型の旅」とは対極にあるスタイルをめざします。400年ほど前にメイフラワー号に乗ってプリマスの地にたどり着いた「巡礼者の一団」が上陸前夜に「メイフラワー盟約」(合衆国憲法の嚆矢とされる)を結んだ故事に学び、8月1日の結団式場で「平和巡礼団」の「憲法」にあたる「サンフラワー盟約」を起草し、締結します。昨年度に参加した5名の先輩学生たちが、「学生リーダー」として再登場し、旅行団の活動を支えてくれます。イベント企画の多くを彼らに任せ、学生主体の運営を行います。

(4) 参加費はやや多い目に設定していますので、残余金が出たばあい、旅行終了後に返金します。これとは別に、全員で移動する際の市内交通費(タクシー・市街電車など)、入館料、献花の花代、折り鶴、灯篭流し、歓迎・お別れパーティの費用として、参加者全員から1万円を集め、「共通基金」を設立し、学生リーダーの管理下で運用します。アメリカン大学関係者や教員スタッフも、同じ旅行団コミュニティの同格の一員ですので、平等に「徴税」されます。「共通基金」については学生リーダーが8月10日の解団式場で決算報告を行い、残余金が出れば、返金します。

(5) それ以外の出費は、毎日の昼食代、歓迎・お別れパーティ以外の夕食代、オプション行事への参加費、嗜好品代、帰りの旅費くらい。2-3万円ほど見ておけばよいでしょう。

(6) イベントの後には必ず「振り返りの時間」を設け、感想を交流し、旅行内容の改善が図れるようにします。京都での神社仏閣の見学、カラオケ交流、広島での宮島見学や「平和ナイター」での広島カープ関係者との交流、長崎での港めぐりや教会めぐりができるよう、自由時間を増やします。

(7) 優れた通訳能力をもつ方が同行しますので、英語が得意でなくても、平和問題や映画型の学習スタイルに強い関心があれば、参加を歓迎します。9泊10日の間、英語のシャワーを浴びますので、旅行中に英会話能力は伸びるでしょうし、心がつながる友達を世界各地につくるチャンスです。英語に自信がなくても、やる気とホスピタリティの心があれば大丈夫。安心して応募してください。

(8) このプログラムの過去の写真や記録を知りたい人は、アメリカン大学核問題研究所のHPにアクセスしてください。様々な写真や過去の映像番組を見ることができます。2015年度の旅を描いた映像作品、近藤絃子さんを描く各種の映像番組などは出色です。

(9) 諸般の事情で、このプログラムの開催は、今年が最終回となります。「最後のチャン

ス」となりますので、参加希望者はぜひ応募してください。

4) 3度の事前研修と準備レポートを用いた学びあい

5月中旬になると、交流セミナーの13名の参加者が決まりましたので、衣笠キャンパスと別府のAPUとをテレビ回線でつなぎ、3回の事前研修セミナーを行いました。

同じ時間帯に、クロス先生の指導下でGSの11名も、隣の教室で、別個に事前研修セミナーを行い、終了後は合同して、SC主催の「旅の説明会」に移るというやりかたで行いました。

平和交流セミナーとGSセミナーとは、到達目標が異なりますので、事前レポートの課題も、最終レポートの課題も、別となります。平和交流セミナーのばあい、つぎのテーマで2度の事前レポートを作成してもらいました。

第1回レポートの課題（6月10日出題）

以下の6問のすべて、答えてください。字数は自由です。

- 1) ①「核兵器」(核爆弾・核砲弾・核弾頭・核機雷など核爆発装置と狭く定義)とは何ですか。
- ②最近、朝鮮民主主義人民共和国はプルトニウム・コアの中心部に少量の核融合物質(トリチウムガスなど)を封入した「ブースト型原爆(Boosted Bomb)」の実験に成功したとされます。「ブースト型原爆」とは、単純な「原爆」や「水爆」とどう違うのですか。
- ③最新型の核兵器の形状、能力について調べてください。
- 2) ①最新型核兵器のばあい、これをスーツケースに入れ、人力で運搬することはできますか。
- ②東京の上空200キロの宇宙空間で1メガトンの核兵器が爆発したとしましょう。首都圏には、どのような影響が生まれますか。
- ③半壊した福島第一原発が航空機やミサイルによる軍事攻撃を受けたとしましょう。どのような影響が生まれますか。
- 3) 米国のトルーマン政権は、①なぜ2発の異なるタイプの原爆を立て続けに日本に投下したのですか。
- ②東京の皇居・政治中枢部や京都を投下先リストから外したのはなぜですか。
- ③日本軍を「無条件降伏」に追い込むうえで、原爆投下が決定的な役割を果たしたという説は正しいですか。決定的な役割を果たしたのは、どのような要因でしょうか。
- 4) ジョン・ハーシー『ヒロシマ・増補版・新装版』を読み、関心をもった任意のテーマについて調査し、レポートしてください。適当なテーマがないばあい、近藤紘子さんとお父さん、米国に渡った25名の原爆乙女の人生について、調べてください。
- 5) ①長崎において、プルトニウム型原爆の投下目標地点として、常盤橋から眼鏡橋という地域が選ばれていたのはなぜでしょうか。
- ②曇天に遮られたため実際に投下されたのは、3.6キロ北の浦上地区でした。浦上というのは、どのような町でしたか。「浦上4番崩れ」を含む隠れキリシタンの歴史、被差別部落民との抗争の歴史についても調べてください。
- 6) 『日米交流で原爆を探究する旅——20年の歩み』を読み、関心をもったテーマや資料・写真を選び、背景となった事実を調べて報告してください。その際、アメリカン大学 Nuclear

Studies Institute のHP、中国新聞社のヒロシマ平和メディアセンターの運営する「ピース・ミュージアム」のHP、直野章子さんの労作『原爆体験と戦後日本——記憶の形成と継承』（2015年、岩波書店）の参照を薦めます。

提出期限は1か月後の7月7日（金）の深夜12時、提出先は、「マナバ」の本科目の部屋としました。「マナバ」というのは、大学が用意した科目専用のホームページのこと。おかげで受講生が互いに、どのようなレポートを書いたのかを読みあい、学びあうことができます。

第2回レポートの課題（7月9日出題）

以下の3問から2問を選んで、取り組んでください。

1) アジア太平洋戦争（1941年12月－45年8月）中に、日本内外で日本帝国の戦争遂行のために強制的に（騙された場合も含む）動員された朝鮮人・中国人、その他外国人の総数は何名でしたか。うち慰安婦とされた人たちは、どの程度の割合を占めていますか。彼らのうち、広島・長崎の地で、被爆した者は何名程度で、45年末までに死亡した者は何名程度いましたか。

2) 1950年に始まった「朝鮮戦争」は、67年をへても、終結せず、東アジア史上、最長の戦争となっています。最初の40年近くは、武力統一論を放棄しなかった北朝鮮側に重要な責任があったとされていますが、1990年代末に北朝鮮側は武力統一方針を事実上放棄し、「朝鮮戦争の終結」を求めるようになりました。にもかかわらず終結しないのはなぜですか。戦争を終結させ、半島危機の解決に結びつけるには、どうしたらよいのでしょうか。

3) 本年3月、国連では史上初めて「核兵器禁止条約」を制定する動きが始まりました。この動きは国連加盟国の大多数の支持を得ていますが、核保有国、並びに日本など米国と軍事同盟を結んでいる国々は「現状で核兵器を禁止すれば、世界はいつそう危険となる」として反対しています。「核兵器のない世界」を作ることは望ましいことですか。危険なことですか。前者としたらいい、どうしたら実現するのでしょうか。

マナバへの提出締め切りは、プログラム開始の前日の7月31日（月）の深夜12時。分量は自由としました。

この2回の事前レポートは本科目のHPに掲載されますので、参加者は互いに自由に読み合い、コメントをつけあうことができます。最近の若者は、友人・同輩の見解を気にし、自分のレポートの見解がどのあたりに位置しているかに敏感であり、よく読み合っていたようです。

5) 3日間の京都プログラムが始まる（8月1日－3日）

前日にAU関係者が来日

7月31日午後3時に、ピーターに引率されて、AU学生8名が関西空港に到着しました。藤岡とSC一人が出迎え、空港バスで京都駅に。近年は旅費を少しでも節約するために、バスをよく用います。地下鉄で北大路駅まで移動し、北大路ビブレ内のスーパーマーケットで、夕食と翌朝の食材を買いこんだ後に、タクシーに分乗して、金閣寺裏の衣笠セミナー

ハウスに向かいました。

8月1日：旅行団の憲法制定、平和家族づくり、京都観光

9:30 立命の学生は荷物持参で、宿舍の衣笠セミナーハウス（衣セミ）にチェックイン。A P Uの学生3人も、別府から夜行船に乗り、同時刻には衣セミに到着しました。

10:00—12:00 結団式（衣セミ1階の会議室）

午前10時から12時に、会議室で、旅行団の結団式を行い、まず旅行団の憲法にあたる「サンフラワー盟約」の作成にとりかかりました。

500年余り前に、ピリグリムファーザーズたちがメイフラワー号に乗って、ボストン近郊のプリマスに上陸しますが、上陸前夜に船内で採択された「メイフラワー盟約」が、米国の「建国」の原点、米国憲法の母体になったとされます。その故事に学び、旅行団コミュニティのルールを定める「憲法」（「サンフラワー＝向日葵」盟約）の制定が、私たちの旅の原点をなし、20年前から続く伝統の行事です。

合意・採択された本年度の「向日葵盟約」（Sunflower Compact）は、つぎのようなものでした。正文は英語ですが（資料—17参照）、日本語訳は、次のようなものでした。

平和巡礼団「向日葵盟約」

1995年に創始された巡礼団の第23次設立総会場で決議

2017年 8月2日京都

- 1) 「向日葵」を名乗るわが平和巡礼団共同体は、これまで民主主義的ルールにもとづいて統治されてきた。この伝統を受け継ぎ、第23次共同体も、厳密なる民主主義的ルールに則って、設立され、統治されるものとする。
- 2) 1996年6月4日にウクライナ共和国ペルヴォマイスクの核ミサイル基地の解体式において、当時の米国国防長官ウィリアム・ペリーは、「皆さん、ミサイルサイロの跡地に向日葵を植えようではありませんか。地球上のすべての子供たちに平和を贈るために」という演説を行ったが、我らはこの演説を記憶にとどめる。とともに我らは、1945年8月6日に広島赤十字病院玄関の花壇の上に放射状に並べられていた、向日葵のような中学生たちの死体を忘れない。
- 3) 我らは以下のルールのもとで「平和巡礼団共通基金」を設立する。
 - ①一人一票の平等ルール
 - ②全市民（教員・SCを含む）から平等に1万円を徴収する。
 - ③共通基金は、市内交通・入館料・被爆者への記念品や献花、歓迎パーティ・打ち上げパーティ費用などのために支出される。
 - ④共通基金の徴収・管理・支出は、SCが行う。
 - ⑤8月10日のまとめの総会場で、会計報告がなされ、残余金が出た場合は、公平に返金される。
- 4) 今次の共同体は42名の市民からなるが、つぎの3つのグループから構成される。
 - A. 教員グループ4名（ピーター・カズニック、藤岡 惇、クロス京子、近藤絃子）

B. S C (学生コーディネイター) 5 名

C. 33 名の学生 (AU から 9 名、立命館大学から 21 名、立命館アジア太平洋大学から 3 名)

5) 講師謝礼、会議室利用料、S C 支援費、通訳謝礼などの費用を寛大にも立命館大学が負担された。ご厚情に心から感謝する。

つぎに S C を除き 5 名単位で 7 組の平和＝友愛家族 (ピースファミリー、一部は 4 名) を結成しました。大体、京都では、平和家族単位で食事を共にし、観光にも行くことが奨励されます。広島以降では、平和家族の枠を超えて、もっと自由にグループをつくることを奨励します。

正午から、平和家族単位で、適当に昼食。京都各地の見学ツアー (嵐山や伏見稲荷など) を平和家族単位で実施。 夕食 (自弁)。門限は午後 10 時なので、それまでに帰還を。

22:00ー 有志の自由交流会 (宿舍の 2 階談話室)



京都のコンビニでもアンパンマンが出現

8 月 2 日 (水) : 平和ミュージアムの見学、セミナー 1

9:00 セミナーハウス玄関に全員集合、この日の行動説明・質疑

9:30ー11:20 平和ミュージアム参観 前日から始まった「平和のための戦争展」も見学。

13:15ー18:00 京都セミナー 1

このセミナー開始時に、近藤紘子さんが来られ、旅行団員から歓迎されました。この日に語られた近藤紘子さんの思いは、「核廃絶 願い継いで 日米の学生 20 年に想い伝え」という記事となり、『毎日新聞』で報道されました。(資料—18)。

1) 13:15—13:45 私の被爆と京都における被爆者運動の紹介

花垣ルミ (京都被爆者懇談会世話人)

通訳は友人の谷川佳子さん



2) 13:45—15:10—— 「満員電車で被爆して、朝鮮人被爆者への私の思い」

米沢鐵志 (通訳: 藤岡惇)

3) 15:20—17:20 「私の人生体験」 米国テレビ番組のビデオ上映 近藤紘子

(自分で通訳も)

4) 17:30—18:00 丸木夫妻「原爆の図」の米国での展示の経験と課題

小寺隆幸 (原爆の図丸木美術館理事長)

平易な英語での講演、通訳なし

18:10 ---19:40 歓迎夕食会 (生協の諒友館食堂)

21:00—21:30 振り返り集会 司会・通訳はSC集団で (宿舍の2階談話室)

3日(木): 京都セミナー2・3、「京都の夜」を楽しむ

9:00 セミナーハウス玄関に集合、衣笠キャンパスに向かって徒歩で出発

9:30—11:50 京都セミナー2 (恒心館 721 教室): 原爆投下と敗戦の真実を考える

「オリバー・ストーンが語るもう一つのアメリカ史」という映画の第3章(原爆投下)を上映しました。この映画の企画者であり、シナリオのほとんどを執筆したピーターから、補足説明をしてもらい、その後、議論しました。ピーターには、小学生でも分かる平易な英語でゆっくりと講演するように注文をつけたので、通訳なしでもある程度は理解できたようです。

13:00—14:30 京都セミナー3: 世界の現実と平和の創造

——「核兵器禁止」は世界を危険にするか、平和にするか (恒心館 721 教室)

1) 世界紛争の構造と和解・共生・平和への道 クロス先生 (平易な英語で)

2) 日本の平和主義のゆくえー9 条改憲の動きをどうみるか」

君島東彦 (平易な英語で)

15:00ー 平和家族単位か有志で街中へ。観光と夕食 (自費)

6) 旅のクライマックスー広島にて (8 月 4 日から 3 泊)

広島市の平和公園へ

午前 7 時に予約した 14 台のタクシーに分乗して、JR の円町駅に向かいました。7 時 43 分に JR 円町駅を発車した通勤電車に乗りこみ、無事に京都駅に到着。8 時 23 分に発車する「ひかり」に乗りこむことができました。外国からの参加者は、JR パスを購入して来日していますが、JR パスでは新幹線の「のぞみ」は乗れません。そこで立命側参加者も、AU 側と連帯して、「ひかり」で移動することにしましたのです。

定刻の 10 時 35 分に広島駅に到着し、駅から北へ 5 分の定宿の「東横イン・新幹線口」にチェックインしました。スーツケースなどを 1 階フロアで保管してもらい、11 時半にホテルを出発。広島駅で昼食を取った後に、広電の市街電車に乗って、原爆の投下目標となった T 型をした相生橋前で下車。島外科を見て、再び原爆ドームから相生橋に戻り、平和公園に入りました。原爆供養塔ほかの追悼碑、国立祈念館をみた後に、

14:15ー15:30 平和記念資料館東館を見学 (本館は、改修工事で閉鎖中)

15:30ー16:20 ノーマン・カズンズ記念碑などを見たのち、徒歩で爆心地から東 500 メートルにあった袋町小学校の敷地内にある被爆校舎の遺構を訪れ、階段の壁に刻まれた「私は無事だ、連絡を乞う」といった文章などを見学。徒歩で袋町電停前のアドバン貸し会議室に移動。

16:30ー19:00 広島セミナー 1

1) 16:30-17:00 資料館展示の振り返り集会 司会・通訳は S C 集団を軸に

2) 17:00-18:30 被爆者の証言と質疑 河野きよみさん (85 歳)

通訳は娘の森河伸子さん (W F C)

生々しく、広島 2 中の生徒たちの遺体が、広島赤十字病院の玄関の花壇に放射線状に並べられ、向日葵のように見えた話をしていただいた。



- 3) 18:30-18:55 シュモー・ハウスとシアトルのサダコ像、WFCの話
森河伸子 (WFC)

5日(土): 貸し切りバスを活用

8:30 玄関に集合 貸し切りバスに乗車

9:00-12:00 広島セミナー2 (アステールプラザ大会議室A)

1) 9:00-10:40 「原爆無差別殺戮の犯罪性と日米の戦争・戦後責任」

田中利幸(広島市立大学名誉教授) 自分で通訳

2) 11:00-11:50 講演予定のステューブが錯覚で郊外にいたことが判明。午後に

回ってもらい、近くのコンビニから食材を調達し、昼食をとりながら、「プログラムで何を学んできたか、何を改善すべきか」の中間の振り返り集会に切り替え。

司会・通訳はSC集団で



12:00 バスで出発。広島女学院高校の平和サークルの代表の庭田杏珠（にわた あんじゅ）、英語科講師の竹井幸智子（たけい さちこ）さんも同乗された。

広島赤十字・原爆病院メモリアルパークで途中下車して、強烈な日差しのなか、河野きよみさんの描いた「花壇の少年遺体」図を見学（この遺体図は表紙を参照ください）。

その後、中区江波のシュモーハウスに向かう。

12:45-13:20 シュモーハウスを見学。

米国の平和活動家で森林学者、クウェーカーでもあったフロイド・シュモーが敗戦 4 年後の 1949-53 年に贖罪の心をこめて、来日し、広島市内 4 か所に住宅や集会所など 15 棟 21 戸を手作りで建設し、「ヒロシマハウス」と名付けた。集会所となっていた建物が 2013 年にもともとあった広島港に近い江波町で保存され、一般公開された。室内には当時の写真や資料が並べられており、「シュモーに学ぶ会」の皆さんの説明を受けた。

これらの活動が評価されて、88 年に谷本清平和賞を受賞。賞金を元手に 90 年に郷里のシアトルに「平和公園」を開き、被爆少女・佐々木禎子の像を設置したなどの事績が述べられていた（資料—19）。同じく広島にワールドフレンドシップセンターを作ったバーバラ・レイノルズの歩みと好一對と言ってよい。シュモーと皇太子（現天皇）との 2 度の面会を含む交流の歴史は、資料—20 に詳しい。

13:50-14:30 放射線影響研究所



講堂を見学。まるでモルモットのように専門家たちの集会の前で、裸身をさらさせられた近藤紘子さんの屈辱の体験の空間——講堂も毎年、5 日の午後 3 時前後に訪れます。これで 15 回目の訪問でしょうか。写真は現場で体験を述べる紘子さん。右に着席しているのが、実弟の谷本建さんです。「調査すれども治療せず」と被爆者から人体実験のモルモット扱いされたという批判を受けてきたことを踏まえ、放影研の丹羽太貫理事長は、昨年 6 月 19 日に設立 70 周年の記念式典で「心苦しく残念」と述べたうえで、「大変申し訳なく思う」と

の考えを文書で示したそうです（資料—21）。

15：30——16：50 広島セミナー3 （日本キリスト教団流川教会の聖堂で）

1）15：30－16：10「核廃絶を進めていくうえで必要なこと、日米学生への期待」

平岡 敬さん（プログラム開設時の広島市長）
（通訳は、市長時代のスタッフの渡辺妙子さん）



2）16：10－16：45

スティーブ・リーパーさんの講演「現下の情勢と核廃絶の展望」

時間の誤解から午前の講演会には来られなかったスティーブ・リーパーさんが、広島郊外の平和の合宿所から駆けつけ、「核兵器禁止条約は世界を危険にするか、平和にするかー核抑止力論を考える」というテーマで、日英両語で語っていただきました。スティーブのお父さんは台風で沈没した洞爺丸事件で、他の乗客を救うために自らのライフ・ジャケットを与えて、犠牲となった牧師さん。広島平和文化センター理事長を務め、今はアトラントと広島とを行き来する平和運動家で、ピーターの友人でもあります。



17:20-18:00 縮景園へ入園。

紘子さん・建さんの案内で8月6日の夜に被爆者たちが救いを求めて集まっていた場所、当時満ち潮で塩水が押し寄せていた川、渡し船で対岸に被爆者を運んだ地点などを案内してもらいました。

例年ですと、夕刻からは平和ナイターの日であり、広島カープを応援しに、マツダスタジアムに行くのですが、今年は、試合がなく、自由行動に。夜は、ホテルの1階のフロアで、「平和巡礼団」の恒例の行事ですが、皆で折り鶴づくりに精を出しました。





6日（日）：被爆72年の式典、原水禁大会、宮島へ

6:00 1階に集合。朝食を済ませたグループからタクシーで相生橋のT型の真ん中で下車。平和公園を南へ、公園の北西部の身元不明7万人の遺骨を埋葬した原爆供養塔での宗派を超えた慰霊式典に参加。

7:20-8:50 広島市主催の慰霊式典に参列。ピーターと紘子さんは来賓席。AU生は、通訳装置のある外国人席に。

9:10 原爆供養塔の前に再集合。会場内外でもらったを原爆供養塔と韓国人慰霊碑の方に献花。

9:40-13:40 自由選択（自費）

① 10時半から12時まで：ワールド・フрендシップセンター

館長挨拶 岡田恵美子さんの被爆証言（英語への通訳あり） 引率：クロス先生
バーバラ・レイノルズたちが開設した「ワールドフрендシップセンター」の歴史については、資料—22を参照して下さい。

②藤岡の引率で、午前中に明教寺墓地の墓参行事と本川小学校の被爆資料館を見学。

午後のオプション

1) 反核集会の見学

①13:00-15:30 原水禁世界大会ヒロシマデー集会（県立総合体育館・グリーンアリーナ）を取材・見学。その後 ②8・6国際対話集会～反核のタベ2017 14:30-18:00 広島市まちづくり市民交流プラザ 6F に移動。ピーター、川崎哲さんたちの被爆シンポジウムを見学。

2) 世界遺産の宮島へ SC集団とクロス先生が引率

19:00——全員サダコ像まえに集合し、献鶴①（折り鶴の半分）。19:10頃から、とうろう流しに参加

7) 長崎へ移動し、フィナーレへ (7日から10日昼まで3泊)

7日(月): 原爆資料館とセミナー1

7:10 ホテル玄関に荷物をもち集合、チェックアウト、点呼。

8:03 広島駅でひかり441 9:26 博多着 弁当を買う。

◆立命グループは9:55 博多発かもめ13号(立命は 号車) 車中で昼食

11:46 浦上着 SCのガイドのもと、タクシー1台に3-4人が乗り

◆AUグループも、30分後の同じカモメの後続列車に乗り遅れ。1時間後に浦上に到着。

アルファイン長崎 にチェックイン(全員シングルの部屋)

13:20 ホテルを出発、徒歩で

13:40-14:50 原爆資料館(入場料は共通経費)、14:50-15:20 国立平和記念館(無料)を見学。

爆心地公園をへて、15:35頃の電車で浦上へ戻る

16:00-18:50 長崎セミナー1 (長崎総合福祉センター(浦上)3階講座室)

1) 16:00-16:15 原爆資料館の振り返り 司会・通訳はSC集団を軸に

2) 16:20-17:50 核兵器をめぐる現状と核兵器禁止条約制定の動き 英語で
中村桂子(長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)准教授)

3) 18:00-18:50 長崎の運動に思う

岡まさはる長崎平和資料館の活動を中心に

園田尚弘(資料館理事長)

通訳:山口 響さん(長崎証言の会)

コメンテーター 木村朗

8日(火): 長崎大学にて世界平和首長会議を傍聴、岡まさはる記念館を訪れる

8:45 片足鳥居の見学に向かう。

9:15 大学病院前駅から市電で長崎大学前へ

午前: 世界平和首長会議第9回総会の見学・傍聴

(長崎大学中部(なかべ)会館)

9:45-11:00 開会式 11:00-12:00 被爆証言(同時通訳機器あり)



12：10－13：00 長崎大学の生協食堂で昼食

15：00——17：00 国連の中満 事務次長（軍縮問題特別代表）との交流会
長崎大学にて 立命の学生を中心に10名ほど。引率：クロス先生
他の学生は、岡まさはる平和資料館をはじめとした長崎見学

21：00－22：00 ホテル2階で日本語・英語グループに分かれての振り返りの集い
司会はSC集団を軸



9日（水）：城山小学校と平和公園で開かれた被爆式典

7：20 立命関係と日本語のわかる参加者は、第一陣として出発

7：30－7：55 朝鮮人慰霊碑前の集会に参加。8時15分に城山小学校に到着

8：30－9：20 城山小学校の慰霊式典に参加、子どもの平和像に千羽鶴を献鶴



10:00 慰霊式典会場に入場

10:35—11:45 市主催の慰霊式典

12:00 頃 被爆者の店の地下小会議室に全員集合。

12:10—13:00 日本被団協前事務局長の田中熙己さんとの交流会

(被爆者の店の地下小会議室)



その後は、自由活動 長崎駅から出島・大浦・グラバー邸・港周り、など

18:00—20:30 フェアウェルパーティ

長崎の新地中華街近くのオーガニックレストラン「ティア」 長崎銅座店を借り切り。
オーナーの久保山さん：立命経営出身、UBCに留学した経験があるとのこと。

18:00—18:30 会場で平和を祈るコンサート

18:30—20:30 バイキング形式にて



その後、出島の浜で花火。

10日（木）：最後の振り返り集会、現地解散

8：40－タクシーで長崎駅近くの教育文化会館2階の大会議室へ
文化会館は取り壊しの直前で、最後の会議室利用であった。

9：15――12：20

全体プログラムのふりかえり集会と解団式（共通基金の清算）

集会では2時間余りをかけて、10日間の「平和の旅」全体を振り返り、気づいたこと、これからの生き方に受けたインパクトなどを、自由自在に交流しました。順番に当てることはせず、生命のダンスのリズムに順応して、気づいたことをその都度、交流し、新しい論点があれば、SCが白板に書き上げていきます。まさに生命体の自然な呼吸のリズムに順応した非暴力的なコミュニケーションを実践する集いとなりました。通訳はクロス先生です。





上の写真は、解団式でのS C挨拶

12:30 長崎で現地解散。AU一行は、品川まで行き、翌日午後の成田発フライトに乗って、帰国。

8) 旅行後の最終レポートづくり、事後研修、成績評価

最終レポートの論題は、つぎのようなものでした。

「今回のプログラムに参加するなかで一番関心をいだいたテーマを設定し、論じてください。対象をできるだけ明確に限定し、他の受講生が読んで「目から鱗」の感動を呼ぶレポートに仕上げてください。分量は自由です。

10月11日（水）から10月14日（土）までにマナバに提出」

事後セミナーは 10月7日（土） 15:00—17:30。その後に「打ち上げ」コンパを行った。科目の成績評価は、受講生の自己評価を可能な限り尊重しつつ、一定の補正を加えて、行いました。

（文責 藤岡 惇）



第3章 学生と教員をつなぐS C集団の歩み

——笑顔を創る達人の面々への感謝をこめて

Adam Franklin (国関4) Yang Yitian (国関3)
石原光夏 (APU4) 織田充海 (国関3)
西田安純 (APU3) 矢口翔大 (国関4・文責)

はじめに

藤岡惇教授とピーター・カズニック教授によって始められた「平和の旅」は、2017 年をもって、23 年を経過しました。私(矢口)も 1995 年生まれですので、私と同じ年輪を刻んだことになります。

この旅は、多くの人に愛され、参加者の生きる姿勢にも大きな影響を与えてきたプログラムでした。今回をもって休止されるのは残念です。何とか復活の道を探ってほしいと思います。

S C (Student Coordinator) の立場から、本年のS C活動のまとめを行うとともに、もしこの旅が復活したばあい、改善してほしいこと、教訓として申し送りたいことなどを「遺言」として残しておきたいと思います。

S Cの使命の明確化——旅行団コミュニティの民主的形成のための調整者＝触媒

私たちの旅行団（巡礼団）とは、「サンフラワー盟約」という憲法を制定し、共同業務を遂行するため教員スタッフからも平等に共通基金（税金）を集め、財政民主主義を実践する自治体であり、営利企業（旅行会社）の企画するパックスツアーとは対極にある存在です。S Cとは、旅行団から遊離し、外から参加者を監視したり、スケジュール管理に走るタイプのツアーコンダクターのような存在ではありません。それとは逆に、旅行団コミュニティの一員として、教員層と一般参加者とを繋ぐ立場にあります。参加者は旅行団の一員として、自治能力を学び、民主的社会の形成者として成長していくことが期待されていますが、とくにS Cには、過年度の経験者・先導者として、共同体の公益実現のために、メンバー間の私益の衝突・矛盾を止揚する調整者、共同意思を形成するための「触媒」となることが期待されます。したがって一般参加者以上に、統治能力を磨き、非暴力コミュニケーションの達人に成長する必要があるのです。

出発前日京都衣笠キャンパスで開かれたS Cのミーティングで、6人の勇敢な素晴らしいS C仲間の中で、まず上記の使命と役割について、確認しあいました。

私自身、今年で3度目の参加（うち2回はS Cとして）となりますが、次の二つの目標を掲げて、プログラムに臨みました。

①「自己の就職活動の売り込みに役立てる」といった狭い「私益」の立場でSCを行うのは邪道。あくまで旅の参加者・学生たちに寄り添い、サンフラワー盟約のめざす旅行団共同体づくりという公益の実現のために貢献する。

②「ツアコン」的な管理主義の立場を克服し、過年度参加の経験を活かして、プログラムの教学内容にも積極的に参加し、セミナーでの討論・司会・通訳といった役割も積極的に担っていく。教学内容に積極的にかかわることで、参加者たちと共同の体験を積むことができ、ピースファミリー（前半の日程の行動を共にする小グループ）を形成する学生たちとも心を通わせることができるSCに成長できると考えたのです。

旅の全体的構図をたえず想起し、旅の使命をどう実現するかという目標に向けてSCが集団として団結し、生き生きとして仕事するように心がけました。SC集団の仲の良さや団結の水準というものは、オーラとして学生たちに伝わっていくものです。

私自身、近藤紘子さんの被爆体験に涙したことを思い出しますが、参加学生というのは喜怒哀楽の間を行きつ戻りつしています。ハードな講義やセミナーも続きます。彼らが安心して、行事に参加していけるかどうか、SCの腕が試されます。「なすべき課題リスト」に完璧に☑チェックを書き込めたかどうかは実は重要ではありません。新幹線の時間などを除くと、予定は伸縮自在なもので、変わってもよい。むしろ学生たちと同じ目線に立ち、彼らのニーズを実現するために、一体感をもってプログラムを伸縮させ、融通無碍に変えていけるかどうかがかぎだと思います。

準備活動にどんなに切羽詰まった時でも、教学的内容に関わりながら活動していると、上から目線の管理主義に陥らずにすみずみ。皆との心の距離がぐっと縮まり、連帯感が広がるのです。

次世代のSC 候補の方に訴えます。学生と同じ目線に立ち、学生の心に寄り添うことができるSC は参加者からの信頼をグッと引き寄せ、笑顔を生み出せる存在です。SCは学生でもあり、スタッフでもある存在ですから、受講生との自主的活動に自在に溶け込んだり、教授とコンパをしたりと、色々な立場に身をおくことができる魅力ある存在なのです。

SCの魅力——リピーターとして影響力を高められる

「セミナーで学ぶ内容は同じであっても、個人個人の意見や感じ方が異なるという点から、共に学ぶメンバーが異なれば私自身も新たな視点で考えることができた」と2017年度SCでどんな場面でも冷静な織田充海は振り返ります。セミナーの真の達成目標が歴史や平和について受動的でなく能動的に学ぶことですから、SCが積極的に参加者とクラス内外で議論をすることは、好影響を与えることが多いのです。

「歴史は、人類の共有の記憶であると強く感じました。異なる背景と意見を交換しながら将来を検討することは大事だと思いました」と話すのは中国浙江（セッコウ）省出身のヤン・イーテンです。グループごとのディスカッションの時間を多く設けるとより多くの学生が自発的に発言しやすくなります。そこで、能動的学習のキッカケ作りをSC主導で達成することを目標に掲げました。

自分の意見が人と違うと、日本人は発言することを躊躇し、怖がります。日本人は戦後教育の在り方のせいかな平和や戦争に関する意見をあまり述べない傾向にあります。グループディスカッション・プレゼンテーションの際に日本人生徒による積極的な挙手を促し続

けることは、旅を通して継続する意義がありますし、一人がきっかけとなれば、続いて発言する気風と文化が生まれ、その輪は広がっていきます。「私が夏季休暇に広島平和資料館でアンケート調査をした時も、多くの日本人は書いてくれませんでした。海外からの来館者はほぼ 100%書いてくれました。本ツアーは今まで会った事がない人同士が集まって参加する形態ですので、特に日本人のばあいは、積極的に意見を述べられる環境づくりを事前授業から作っておくのが良いかと思います」と西田安純は話します。

備えあれば“想定外”にも自在に対応できる

――未来の SC へのメッセージ

「参加者の年齢やバックグラウンド、天候などで予想外の事態や急な変更が起きてしまうのがこのツアーの特徴です」と、西田は振り返ります。そのため参加学生、先生方、旅行会社や大学事務との連絡を欠かさないことは円滑にセミナーを進めるために大切でした。セミナー前には、30 人超の立命館大学の学生一人一人にメッセージを送り、不安を取り除くことに尽力しました。

とはいえ今年も想定外の事情が幾つか出現しました。例えば広島から長崎に移動する際、博多駅で乗り換えましたが、ピーター率いる AU 生全員が長崎行きの特急列車に乗り遅れたことがその一例です。即座に SC の 6 人は役割分担し、スムーズに対応して解決しました。蒸し風呂の中にいるかのような太陽の下 40 度の天気下での打ち合わせは体にこたえましたが、事態を深刻に受け止め過ぎないことが肝要でした。後に判明したのですが、来日 25 回のピーターですから、乗り遅れても「平気の平左」だったそうです。これは後に冗談のネタとして使われ、旅の道中、皆が更に仲良くなるきっかけになりました。

旅の後期、ピースファミリー（6 人ずつで編成されたグループ）の境界線がなくなる時、グループを離れると孤立勝ちになる人、全体に馴染んでいくのが苦手そうな人を早期発見し、必要な手当てをとってあげることも、重要な務めです。

「大切なことは、問題を問題と捉えないこと」。「平常心」が大切だと思います。少し間抜けな感じがするかもしれませんが、壁にぶち当たった時にそれを深刻に捉えすぎないことです。“これは大変な事態だ”とパニックに陥っては逆効果。皆で励まし合いながら事に当たれば、大概の事態は丸く収まるものです。心に安らぎを持てなければ良いリーダーにはなりません。

APU（大分）・RU（京都）・AU（ワシントン DC）をシームレスに繋ぐ

「大分からの参加だったので、旅本番まで仲間や先生方に会えず不安だったのを覚えていきます。距離的問題で手伝えない仕事があったことや、顔を合わせて打ち合わせができなかったことがその原因です」という意見もありました。SC チーム内の不安を事前に取り除くことは、トライする価値のあるテーマです。やる仕事・やらない仕事の取捨選択は必要で

すが、密なコミュニケーションは推奨されるべきです。特にアメリカン大学とのコミュニケーションにおいては、参加者が決定するのがセミナー直前となる為に不透明なケースが多いので、この辺りは先生と連携を取りながら追いかける事が求められます。

結び

私にとって 2017 年度「平和の旅」は、就職活動真っ只中の営みでした。旅行の合間を縫って、オンラインを用いた就職面接を長崎平和資料館の場で受けていたことを思い出します。

旅行の全期間を通して一切の不安や焦りもなく、旅行を円滑に進行できたのは、信頼できる S C 仲間に恵まれた賜物です。

なお、運営の詳しい分析にかかわって一言。会話の通訳と心のケアで旅行団を一つの大きなファミリーにすることに最も貢献してくれた石原光夏が素晴らしい資料を作成してくれましたので、次節を参照してください。

2017 年度参加者はセミナーの後、2・3 回生を中心にこの「平和の旅」の経験を自分らしいやりかたで周囲に広めていこうと動いています。平和実現を積極的に思案するきっかけとなる小さな種植えが今後も続くことを切望して、この寄稿の結びとさせていただきます。

炎天下をもろともせず、持ち前の健脚で常に先導を欠かさずに尽力くださった藤岡惇先生、私たちの心に休息と栄養を補給し続けてくださったクロス京子先生、明快な団結を示してくれた S C 仲間の 5 人に心から感謝いたします。

SC の笑顔 (2017.08.02 京都・立命館衣笠セミナーハウスにて)
Photo Credit:Yang Yitian



今年の旅の良かった点と残された課題

——突然現れた「助っ人SC」の視点から

石原光夏

(APU 3 回生)

编者注：石原さんは昨年の参加者。当初SCを希望されたが、海外インターンシップが入ったとのことで、参加を断念。しかし予定が変わり、一部なら参加できるとして、自費で京都・広島に駆け付け、7日間SCの補佐役を買って出られた。とくに英語通訳の分野で活躍され、今年の通訳態勢の弱さを補っていただいた。まさに「アンパンマン」のごとき融通無碍の存在であり、広島駅で私たちを見送った後、風のように去って行かれた。以下、石原さんの感想を要約して、掲載する。

今年の良かった点

- 1) 今年は、SCのチームワークが良好で、よくコミュニケーションを取れた結果、ピースファミリーにも適切に連絡事項等が回り、折り鶴づくりなど、やるべきことをきちんとできた。良い雰囲気作りができたと思う。
- 2) 今年は英語が喋れるSCが多かったこともあり、SCたちが積極的にAUの学生と話しあうことができ、一体感を作り出せたと思う。
- 3) このプログラムでは、学者・被爆者・ピースアクティビストなど多様な視座から「平和」や「戦争」について話を聞き、考えることができる。普段出会えないような人たちと出会え、交流できるので、このプログラムは尊い。

改善すべき点

- 1) 言語の壁が残っており、ピースファミリー単位での自由行動時間の過ごし方に偏りがあった。
- 2) 日本人受講生があまり積極的に手を上げて発言しない。せっかく議論したり、考えを共有できるのに、中々できていない。インプットが多すぎるので、もっと対話と討論に重点を置きたい。
- 3) 受講生ともっと混じりたいと思う反面、疲れてくるとSC同士でいた方が楽だと思ってしまい、受講生とゆっくり話す時間が取れなかった。折り鶴等やるべきことが早めに終わっていると、SCにも気持ちの余裕ができる。事前学習の中で15分だけでも折る時間をとって、広島に行く前に折り終わらせたらどうか。

復活したばあい、重視してほしいこと

- 1) もっと多くの若者がこの種のスタディーツアーを経験できるように、クラス数を増や

してほしい。

2) 受講生が発言・質問するよう促す。難しいようであれば、SC も一参加者としてどんどん質問・発言をする。SC だからといって座っているのではなく、「同じ参加者」になる姿勢が大切。SC の姿勢や空気は受講生に伝染するものだ。

3) 1 日の初めに毎日、言語の壁なしに楽しくできるウォーミングアップ運動やアイスブレイキングゲームを 10 分だけでもしたらどうか。頭を目覚めさせる為にも受講生同士のコミュニケーションの為にも良いかと思う。

4) SC になると、人をまとめるという経験も、歴史や戦争についての勉強やディスカッションもできて 2 倍楽しめる。SC の魅力を宣伝して、優秀で無私の SC の確保に努めてほしい。利己的な SC を減らすためには事前研修が必要かもしれない。



第4章 23回目の夏——これが私のハイライト

対話と出会いの新鮮な経験

赤沢佑太（法3）

今回、国際平和交流セミナーに参加して一生忘れることができない重要な経験を得ることができた。この旅の中で印象に残っていることは、八月六日には朝から晩まで多くの人が集まり平和のために祈りをささげていたことだ。国籍や年代性別が異なっているけど同じ考えを持つ人がいることを知り、世界平和の実現への可能性を感じることができた。

これまで、日本全体を見て、平和に関心のある人はそう多くないと思っていたが、実際に広島に行ったことでこれまでのイメージを覆すことができた。一方長崎に行ったときには広島との違いやメディアの取り上げ方の違いを強く感じた。その場に行ったからこそ違いがよく理解でき学べたことも格段に多かった。

普段まず会えないような方々との出会いや貴重なお話がとても印象に残った。近藤紘子さんのお話では、まるで自分が当事者になったかのように感じた。加害者を恨むのではなく戦争そのものが悪であるという言葉はとても印象に残った。自分が当事者であつたらどう考えるだろうか、そのような結論に至れるだろうかと深く考えた。

一人で考えるだけではなく、このセミナーではグループ単位で行動し、意見交換する機会も多く、様々な人の意見を聞き相互的な学習ができた。普段の講義では一方的なものがほとんどだったが、このセミナーでは事前学習から意見を言う機会が多く、とても新鮮だった。今となっては、事前学習からより積極的に意見を出していけばよいと思う。このセミナーが復活するのなら事前学習から受講者同士の意見交換の機会があってもよいと思う。

参加者のメンバーの国籍も多様で様々な意見があり良い刺激を受けることができた。学内外問わず真剣に議論しあえる仲間ができて、とても貴重な財産となった。旅全体を通じて、多くの人と交流し普段の講義と異なり積極的に意見を発信し多くのことを学んだ。今まさに大きく時代が変化していく中で我々若者が平和について考え、未来に向け行動していかなければならないと強く感じた旅だった。この旅で学んだことを今後の人生に活かしていきたいと思う。

この旅が充実したものとなった要因として、立命館大学とアメリカン大学双方の教員の先生方、講義を担当された先生方、サポーターやゲストとして一緒に旅に参加して下さった方々すべてのおかげであると感じる。すべての参加者に感謝の意を表す。

戦争と平和の学び方に大きな刺激

宇谷楓生（経済1）

事前研修3日間と事後研修も合わせて計14日間は、私の心を大きく動かすものでした。このセミナーに参加して実際に被爆者の方から当時の話を聴いたり、原爆資料館を初めて訪れ、長崎・広島での平和式典に参加して、普通に生活してはできないことが経験できました。

最も印象に残ったイベントはやはり、被爆者の方々の体験談でした。彼女、彼らが私達に訴えかけるようにして喋る顔には怒りがあり、時には悲しみがあり、目には今にも流れそうな涙がありました。それを見ているだけで胸がすごく痛くなったし、映像や本などで当時のことを見るよりも、当時の背景などが肌で感じるように伝わってきました。

この活動を通して一番感じたことは、戦争は私たちの行動によって防ぐことができるということです。今までの自分なら「どうせ私一人がやっても…」と心のどこかで諦めていた部分がありました。しかし近藤紘子さんが「次はあなたたちが戦争について次世代に伝えていく番。あなたたちが世界を変えるのよ」と言われ、紘子さんをはじめとする被爆者の方から伺った話を戦争について知識のない若い世代に伝えていくことが私たちにできる最大のことなのだと確信しました。

今までの平和学習は、歴史を学び、考えることが主でしたが、将来再び、戦争はいつ起こってもおかしくないというより現実的に考えるようになりました。では私たちは自分の子供世代、孫世代にどうしたら平和な未来を残してあげられるのかと未来について考えることが必要なのだと気づきました。

また、そういう話を直接に聴き、自分の意見をまとめ、さらにその意見をセミナー後のディスカッションの場で伝えることができました。他人の意見を取り入れることで自分の意見が180度変わったり、もともとあった自分の意見に他人の意見がプラスされ、別の意見が生み出される経験をすることもできました。

もう一つこのセミナーを通じて私が感じたことは、戦争にかかわる教育方法についてです。今の日本の子供にとって、戦争についての知識が大幅に不足していることは紛れもない事実です。私もこのセミナーに参加する前は知識が大幅に欠けていました。原爆について話し合いをしてくださいと言われても話し合えるほどの知識がなかったものですから、すぐに言葉に詰まっていました。

もっと深い内容を授業で学びたい。それも座学だけでなく、時には資料館を見学し、それを見てお互いの意見を伝えあい、知識を増やしていくことが、これからの教育にとって大事なのではないかと思います。この時代に生まれたことに感謝するとともに、これから先もずっと長崎広島で起きたあの悲惨な出来事を忘れず、心掛けながら生きていこうと思います。

人への攻撃ではなく、関係・システムへの攻撃を

竹崎 良（国際関係3）

大学3回生の夏休みに、このようなプログラムに参加することができて、本当に良かったと感じています。核問題や平和についての理解を深めることができただけでなく、これからの自分の人生で何ができるのかを考えるきっかけになりました。

この旅では、近藤紘子さんをはじめとする多くの被爆者や、国連の中満泉事務次長、日本被団協の田中熙巳さんといったキーパーソンからお話を聞くことができました。これは個人で広島・長崎を訪れたのではなかなか経験できないことであり、このプログラムの優れているところだと思います。だからこそ、もっと積極的に色々と質問すればよかったと、今になって後悔しています。

そうは言っても、お話を聞く中で得たことはたくさんありました。その中で最も心に残っているのは、やはり紘子さんのお話です。紘子さんは幼い頃、広島に原爆を落とした米軍のパイロットを憎んでいました。あのパイロットが“悪い人間”で、自分は“良い人間”なのだと、そう信じていました。だから、もし彼に会うことがあれば、パンチして、キックしてやるんだと思っていたのです。

でも、アメリカのあるテレビ番組に呼ばれたときに、原爆を落としたパイロットに出会ったことで、その考えは変わったといいます。その人は原爆を落とした後、「私達はなんてことをしてしまったんだ」と思っていたことを明かし、目に涙を浮かべていたのです。そこから紘子さんは、自分が本当に憎むべきなのはあのパイロットではなく、「戦争を起こす人間の心」なのだという事に気付いたのでした。

この話はとても心に響きましたが、実はこれに関連して、原水禁世界大会でアメリカ代表の人がこんな興味深い話をしていました。

「ここに、ナショナリストとインターナショナリストの二通りの考え方がある。ナショナリストの考えでは、世の中には“良い人間”と“悪い人間”が存在する。ゆえに、“悪い人間”は殺しても構わないということになる。それに対して、インターナショナリストの考えでは、誰もが“良い人間”にもなるし、“悪い人間”にもなる。前者の考え方は戦争を生むものであり、後者の考え方を広めていかなければならない。」

私はこの話を聞いて、腑に落ちるところがありました。私たちは、知らず知らずのうちにナショナリストの考え方に陥ってしまうことがあるのではないのでしょうか。でも本当は、誰もが“良い人間”にも“悪い人間”にもなる可能性がある。だからこそ、本当に憎まなければならないのは、「戦争を起こす人間の心」なのだと思います。

これ以外にも、この旅に参加して多くの気づきがありました。このような学びの機会を作ってくださった藤岡先生をはじめとする多くの皆様に感謝しています。ここで学んだことを胸に、私もこれからの人生の中で、少しでも平和のためになることができればと思っています。

プログラムの復活を望む

日比梨恵（国際関係1）

今回の広島、長崎への平和学習の旅ではとても内容の濃い、充実した時間を過ごすことができた。

まず、このセミナーでは何回か、被爆者の方々から直接お話を伺うことができた。ここ数年で被爆体験のある方々の数が減っており、私たちが直接お話を聞ける最後の世代だと言われている。被爆者の近藤紘子さんがおっしゃったように、被爆体験を聞けることは特権であり、またとない貴重な経験ができたと思う。

また、日本人学生のみだけでなくアメリカからの学生も交えてのセミナーだったため、原爆のいわゆる被害者と加害者が一緒になって平和について学ぶことができた。これは、国際平和交流セミナーならではの特徴だ。さらに、セミナーを通して、平和について興味関心を持っている人が多数おられることを知っただけでなく、そのような人たちに直接に出会えたことも収穫の一つであった。

セミナー全体を通して見ると、スチューデントコーディネーター（SC）の方々の存在・役割が大きかったと思う。過年度に同じセミナーに参加した先輩方が、今度はSCとして、私たちの旅をアレンジされ、色々な面からサポートしてくださったのだ。広島と長崎での式典の席取りなど、今回のセミナーをより良いものにしようと縁の下で動いてくださり、とても感謝している。

数回の事前学習の場で出題されたレポート課題にとりくんだ。そのなかで原爆投下の歴史や認識に関する知識を再確認することができたことも良かった。観光地として有名な長崎の眼鏡橋や浦上天主堂など、背景知識を持っているのといないのでは、実際に見学しても、考えることや思うことが大きく変わる。浅い知識しか持っていなかった私にとって、事前レポートはとても有効なものだった。

今回が最後のセミナーになると言われているが、できることならぜひ今後も続けてほしい。そして復活した際には、日本人同士での意見交換の時間をもっととった方が深い議論や学びにつながると思う。というのも、アメリカの学生との意見交換は確かに貴重で、違う視点から物事を見るのに役立つのだが、言語の違いから日本側からの発言がとても消極的になってしまうからだ。この点が改善されれば、このセミナーはさらにより良いものになると思う。

紘子さんと長崎での加害展示に関心

澤田いろは（総合心理1）

旅の中でもっとも印象に残った出会いは、やはり、近藤紘子さんです。彼女のお話には心を打たれました。実際に戦争という悲劇を体験して、戦争後も苦しんだ彼女の「戦争は繰り返してはならない」という思いには計り知れない説得力があります。

さらに、彼女の勇気に私は感動しました。戦争体験を語るというのは、本人にとって記憶を思い起こすという行為であるため、大変な負担となるでしょう。しかし、彼女はたくさんの場所でたくさんの人たちに経験を語り継いでいる。それは、彼女の戦争に対する思いがすごく強いものであるだと感じました。このことが、お話を聞いていて、ひしひしと伝わってきました。戦争を知らない私たちにとって、紘子さんのお話は強烈であり、戦争は二度と起こしてはならない行為だと、思わせてくれるものでした。

また、広島の流れ川教会でお会いしたスティーブ・リーパーさん（広島平和文化センター前理事長）の言葉が印象的でした。「君達は第三次世界大戦の時代を生きているのだ」と、彼が説いたのです。初めて、戦争というものを身近に感じた瞬間でした。戦争は歴史ではなく、今起こりうる可能性があるものとして、自分たちの中で、しっかりと考えていかなくてはならないのだと、思いました。

旅の中で、岡まさはる記念長崎平和資料館を訪れる機会を設けてくださったのはすごくよかったと思います。私はこれまで、戦争と平和について考えるときに、広島や長崎のことについてばかり考え、「被害者」という立場で、学んでいました。しかし、この資料館を訪れ、「加害者」であった日本の歴史に触れることで、戦争というものをまた違った視点で考えられるようになりました。紘子さんのお話に登場した、エノラ・ゲイの副操縦士の方が精神的に苦しんだことなど、戦争は「被害者」、「加害者」双方の心身をぼろぼろにするものなのだと学びました。

旅の内容の中で、改善してほしいと感じた点は、英語で講義を聞く際に、日本語の通訳をしてほしいということです。専門的な英単語が多いことや自分の英語力が不十分なせいで、理解できないことが多々ありました。せっかくの機会を無駄にしたくはなかったので、聞き逃してしまったことは残念でした。また、他の参加者の方々との意見交換の場をもっと設けてほしかったなと思いました。日本人は海外の人と比べてみんなの前で意見するのは苦手だと思うので、グループディスカッションを多くするなどの工夫をしたら良いのではと思いました。

戦争の実相を伝える平和学習の必要性

松岡 慈 (A P U 2)

今回のセミナーに参加して「平和」について考える機会を作ることができて本当に良かったです。「平和」とは何か、また再び日本が戦争の道へ進まないために私たちは何ができるのか考えるきっかけになりました。私の地元では平和や戦争について学んだとしても、直接的に戦争に関わる話を先生から聴かされることがなく、ただ歴史の教科書を読むことが多かったため「平和」について考える機会があまりなく、記憶に残っていません。そのため、このセミナーに参加するまでは、漠然と戦争は絶対にしてはいけないものというレベルの認識にとどまっていました。

セミナーの中で特に印象に残っているのは、岡まさはる記念平和資料館でした。衝撃的な展示や残酷な展示が多く、とても驚きました。また、信じられない写真や資料が多く、実行した日本兵たちを同じ国民だと思えることが嫌でした。そのような展示を見て、戦争は人間を廃人状態にさせることがあると強く感じました。更に、日本兵の加害行為は今の日本の教育では触れていないが、実際にあったことであり、それを当時の日本の教育が作り上げたものであると感じました。

このような加害行為を同世代や今の子供たちに伝える必要があるのか、それとも必要はないのか正直分かりません。けれど、戦争についての知識が希薄である私たちの世代がこれからの日本の社会を作っていく必要があるので、平和や戦争について、もっと知り、考えることが日本が再び戦争に加担しないためにも重要になると思いました。

平和を築く上で、とくに子供たちのあいだで、平和学習をもっとするべきだと思います。同時に、私たちが戦争体験者や被爆者の話を直接聞くことのできる最後の世代になると思うので、私たちよりも下の世代にどのように伝承していくのか考える必要があると感じました。

学ぶとは変わること

石川未久 (A P U 2)

このセミナーは平和学習に対する意識を変える大きなきっかけになりました。参加する前は、被爆の歴史を学ぶことが1番大事だと考えていました。しかし、多くのことを学んでいく中で、被爆体験をどう受け継いでいくかということを意識するようになりました。

私の最も大きな学びは、多角的に原子爆弾投下の歴史を捉えられたことでした。その 1 つがヘンリー・ウォレスや外国人ボランティアの存在です。アメリカと日本を加害・被害の関係で捉えがちな日本の歴史教育では、アメリカの誰もが原子爆弾投下を支持し、日本への攻撃を望んでいたと考えてしまってもおかしくはありません。しかしながら、原子爆弾に反対する人や、危険を顧みず、被爆者の支援を行った外国人が多くいました。私たちはその事実を知った上で被爆の歴史を継承していかなければならないと感じました。

また、スティーブ・リーパーさんの講義を受け、私たちが負うべき責任について考えるようになりました。「平和学習とは、折り鶴を折ることで、夏休みに登校することでもない」という言葉が印象に残っています。これを聞き、私たちは、祈るだけではなく、伝える責任があると感じました。戦争を知らない私たちだからこそ、日本とアメリカの間の立場で原子爆弾投下の歴史を確実に伝えられると考えるようになりました。

短い時間ながらたくさんの講義を受けられたことがとても良かったです。被爆証言、世界の核兵器問題や戦争責任など、学びの幅を広げることができました。また、多くの式典に参列できたことがとても貴重な体験でした。広島市と長崎市主催の式典だけでなく、宗派を超えた慰霊式典、朝鮮人慰霊碑前での集会や韓国人慰霊碑への献花など、原子爆弾投下による大きな被害を深く考える機会になりました。

このセミナーが復活するばあいには、振り返りの時間を増やすことでより良い旅になると思います。1日に多くの情報を得るので、もう少し長い時間をかけて、考えを熟成させたい、意見交換の場で、自分の見解をまとめ、交流したいと感じました。

アメリカン大学の学生とのディスカッションの場では、英語での細かい説明が難しく、深い内容を話し合うことができませんでした。日米の学生が話し合える貴重な機会なので、歴史認識や歴史教育を比較できると、より学びが深まるのではないかと思います。

国際平和交流セミナーに参加したことで、多くを学び、共有し、色々な角度から広島・長崎の歴史を捉えることができました。この旅は、私にとって平和学習に対する意識を変える大きなきっかけになりました。10日間で得た知識や感じたことを忘れることなく、これからの学習に活かしていきたいです。

同じ過ちを繰り返さないために

中森沙綾（APU2）

私は、高校3年生の時にクラスメイトが発足させた折り鶴を広島に届けるプロジェクトに参加しました。全校生徒に呼びかけたり、文化祭で折り鶴を折るブースを設けたりして、少しでも多くの人に折り鶴を折ってもらおうとしていました。その時は、折り鶴を折って

もらうことで、皆が広島や長崎に落とされた原爆について興味を持つきっかけをつくる、という目的で活動していました。

この日米を結ぶ原爆探究の旅に参加して、原爆については知らないことだらけだと実感しました。とくに長崎に投下された原爆についてはそう感じます。

私は今回の旅で初めて長崎の地を訪れました。広島に比べると、平和記念資料館の規模も小さく、訪れる人の数にも大きな差があるようでした。しかし、強いメッセージを受け取ったのは長崎での旅でした。資料館で上映されているビデオを鑑賞した際、実に生々しく、子どもたちが観たら泣いて部屋を出て行ってしまうんじゃないかと思うくらい衝撃的な映像や写真が使用されていました。

岡まさはる記念館では、日本人の韓国人や朝鮮人に対する加害についての情報が事細かく記録されていました。私が知らない事実ばかりで、1日や2日では考えきれないほど新しい知識を得ることもできました。

今回の旅で最も印象に残ったことは、被爆者の方のお話を直接聞いたことです。被爆者の高齢化に伴って語り部の活動が盛んになってきていますが、本当の体験談を被爆者ご本人から聞くことで、その時の情景、感情、人びとの様子などを明確にイメージできるものです。

近藤紘子さんとお話することができたのは貴重な機会でした。旅の中で、お昼ご飯をご一緒させて頂く機会がありました。とてもエネルギッシュで元気な方という印象を持っていたのですが、ご自身の被爆体験を語る時には感情があらわになり、涙を流されている姿を見て、息をのみました。紘子さんくらい有名な方であれば、これまでに何十回、何百回と被爆体験を語っているはずなのに、今なお涙を流される。私には想像し得ないほどの悲しみの深さ、辛さ・怒り・憎悪など、様々な感情を抱いておられるのだと思いました。

旅の終了後、長崎駅近くのビルで紘子さんに再度お会いすることができました。別れ際に紘子さんがおっしゃった一言が忘れられません。「もう、私たちは先が長くないから、あなたたちに後は頼んだよ」と。

後世に原爆の恐ろしさを伝えること、これは私にとってこの旅に参加したきっかけでもあり、この先も考え続ける課題です。紘子さんから直接受け取ったこのメッセージを真摯に受け止め、自分たちの役割を果たしていかなければなりません。

長崎大学の教授の方の言葉を借りれば、私たちは幸運です。被爆者の方々から直接お話を聞くことができる特権を持っているからです。

北朝鮮の動きが活発になり、核兵器の恐怖が迫っている今だからこそ、原爆の恐ろしさや核兵器について、現実的な問題としても考えられるのではないかと思います。私たちの世代や子どもたちの世代が、過去と同じ過ちを繰り返さないように、“特権”を活かして学び続けていきたいと思いました。

復活したら改善してほしいこと

馬場 渚（国関、GS）

旅のなかで、もっとも印象深かった体験は韓国人慰霊碑への献鶴と岡まさはる資料館を訪れたことです。今まで第二次世界大戦について考える時に原爆投下についてばかり取り上げられてしまうことで被爆国、日本のことを「被害者」としてしか見れていなかったことに気づきました。このプログラムを介して、日本を被爆国としてだけでなく、加害者としても扱わねばならぬことを学ぶことができました。

正直このプログラムに参加するまで韓国人慰霊碑の存在を知りませんでした。私と同じように知らない人も日本に多く存在すると思います。実際に訪れて見ると韓国人慰霊碑を訪ねる人は少なく、報道陣もほとんど立ち寄りません。

岡まさはる資料館では、日本の教科書には出てこない写真が数多く展示されていました。中には日本人兵士が中国人の首を持ち上げて笑っている写真もありました。このような写真の展示は衝撃的で、日本の加害者としての面を認めないわけにはいきません。岡まさはる資料館は長崎市の観光地図にも載っていないし、長崎原爆資料館と比べると、扱いは余りに小さすぎます。日本政府は日本を加害国として扱いたくないという意向を日本政府がもっているのもわかりますが、加害者としての側面をこそ、日本人は知るべきだと思います。

岡まさはる資料館を訪れた時に、京都の 2 日目に被爆者の米沢鐵志さんがおっしゃったこと——「朝鮮人の友達が何人かいたが、日本では朝鮮人は下等な民族として扱われていたため、疎開させてもらえなかった。広島で被爆した 35 万人のうち 5 万人が朝鮮人であったが、そのために 3 万人は死亡した」という言葉に衝撃を受けたことを思い出しました。過去に朝鮮人に残虐な行為をした歴史を理解した上でこの事実を受け入れるべきだと強く感じました。

旅の中で、特に優れていると感じたことは「ピースファミリー」というしくみです。ピースファミリー単位で、旅の間、一緒に行動できました。そのため被爆者や戦争体験者の話を聞いた後、原爆ドームや資料館などを見学した後、あるいは今まで知らなかったことを学んだ時などには、自分がどう思ったか、どう感じたかがお互いに親身に交流することができました。どのように感じたかを話し合うなかで、自分を客観的にとらえ返し、気付かなかったことに気付くこともできます。

アメリカン大学の人たちの考えを聞けたことも刺激になりました。最後に「振り返りの全体集会」を行うことで全員の意見をしっかりと聞くことができました。また 10 日間、どこで、何をし、どう思ったのか振り返ることができ、良い「締めくくり」の機会となりました。

「平和の旅」が復活した場合、改善してほしい点は、資料館をもっとゆっくりと見学したいことです。10 日間で京都、広島、長崎を一気に回ったため、一箇所に使える時間が限られており、どうしても短時間に、多くの情報を詰め込むことになります。資料館をじっくり

りと見て、展示解説を読める時間が欲しかったと思いました。

このプログラムを通してたくさんのことを学び、日本に対する見方も変わりました。アメリカン大学やAPUの人たちとの出会いもありました。ぜひ復活させていただき、広島・長崎への原爆投下を様々な面から考え、真実の歴史にアプローチしていきたいと思います。

第5章 若い世代へ —— 継承への願い

「広島・長崎への平和の旅」の23年間を振り返って

ピーター・カズニック

藤岡惇教授と私とは、1995年に「平和の旅」を始めました。私たち2人の人生を変えただけでなく、数えきれないほど多くの人々の生き方にも影響を与えるようになる、そんな大事業をこれから始めるといった気持は皆無だったというのが正直なところですよ。

当時のことを説明しておきますと、原爆投下50周年を記念してスミソニアン協会が傘下の航空宇宙博物館で特別展を開き、広島長崎で起こった無残な破壊の側面も正直に展示しようと計画していました。しかし保守派や在郷軍人たちが猛烈な反対運動を展開し、展示計画が撤回されるという事件が起きました。日本本土に侵攻せず戦争を終えるには、原爆を投下するしかなかったという誤った考え方に、米国の少なからぬ人々は、今も執着しています。原爆が投下されなかったら、数十万のアメリカ人が死亡していたはずだ。だから原爆投下は正当だったと彼らは信じたがっているのです。

展示撤回という臆病な決定の是非をめぐって、米国内で論争が巻き起こりました。一方の側は、原爆投下というのは20世紀最大の悲劇だったのだから、その全体像と意味を深く究明した展示を行って当然だと主張しました。他方の陣営は、原爆投下についての伝統的神話を守り、投下を実行した米国リーダーたちを歴史の審判から救い出そうと必死でした。

広島平和記念資料館と長崎の原爆資料館は共同して、航空宇宙博物館の原爆展に協力するため、大量の被爆遺品を提供する準備をしていたのですが、展示の撤回を受けて、遺品の多くは、アメリカン大学(AU)の方に送られることとなりました。というのはスミソニアン論争を受けて、AUが、原爆投下50周年記念の「もう一つの原爆展」を行う決断をしたからです。広島・長崎両市が、日本国外で大規模な被爆展示を行うことは稀なことなのですが、最大級の展示会が私どもAUで行われたわけです。その20年後の2015年に、広島長崎両市、および「原爆の図」丸木美術館と共催するかたちで、被爆70周年を記念したもっと大規模な原爆展を、私たちはAUで開催したことも申し添えます。

1995年夏に広島を訪問したことは、私の学生にも私自身にも素晴らしい体験でした。この旅には、ワシントンで知り合った君島東彦教授も同行してくれました。旅行団が広島に到着すると、「全米で反対論が吹き荒れた原爆展をよくぞ引き受けてくれた」として、平岡市長はじめ広島市の幹部の皆さんは大歓迎してくれました。

私個人の思いを語らせていただきますと、広島に足を踏み入れたことは、人生のなかでもっとも感動的な体験のひとつとなりました。長年私は、原爆投下のことを研究してきたのですが、50年前にそこで起こったことの本当の意味をはじめて理解できたからです。こ

れを機会に、広島長崎には何十回も訪問していますが、この地に身を置くたびに、名状しがたい思いを禁じることができません。2 発の原爆が、わが地球上の全生命の絶滅可能性のドアを開けたことにたいして、人生の美と喜びの享受を途中で断たれた無数の人々が生まれたことにたいして、さらにいえばそのような恐怖が今なお続いていることにたいして、底知れぬ悲哀を感じるからです。

毎回、美しい古都・京都から私たちの旅は始まります。最初の年には、3 年前に開館したばかりの立命館大学国際平和ミュージアムを安斎育郎教授・藤岡教授に案内してもらいました。「平和ミュージアム」なるものを見学したのは、人生初の体験でした。このミュージアムが、米国の軍国主義に批判的であるだけでなく、母国日本の軍国主義、アジアの征服戦争にたいしても、批判の眼を向けていることに AU の学生たちは驚き、その公平な姿勢を称賛しています。展示を見て、AU 学生もまた、原爆投下、冷戦、核軍拡競争、最近のアフガン・イラク・リビアへの米軍の侵攻にたいして米国が責任を免れないことに気づきます。

1995 年に北米の大学夏期講座協会が、私たちのプログラムを北米全体で「もっとも創造的で革新的なプログラム」だと認定してくれました。初回の旅が目覚ましい成果を生んだおかげで、この旅を 1 回限りで終わらせるのではなく、AU の核問題研究所が主管して、継続的に行おうと決めました。2 回目以降、立命館大学の日本人学生が一層アクティブに参加されるようになり、AU 生と一緒に語り合う活動が充実してきました。

1996 年の旅には、意義深いハッピーニングが生じました。広島市のそごう百貨店前で、近藤絃子さんと出会えたことです。「『ピーターさんたち、今年も AU の学生さんを広島に連れて来られるようよ』と私の母親が教えてくれたので、ワクワクしてあなたをお待ちしておりました」と絃子さんはおっしゃいました。「なぜなら私は AU の卒業生であり、後輩たちとも会いたいからです」と。

その晩、絃子さんは私たちの宿舎に来られて、自分の半生記を語られました。原爆投下の時には 8 か月の赤ん坊だったこと、父親は谷本清牧師であり、ジョン・ハーシーが 1946 年に出版した『ヒロシマ』というベストセラーとなった古典のなかで描かれた 6 名の被爆者の一人だったと語られたのです。不思議な符合でした。ハーシーの本を、日本訪問前に読んでおくべき AU 生の必読文献に指定していたからです。1 時間ほどかけて彼女は数奇な人生を語ってくれました。旅行団全員がその話に釘付けとなりました。真実への気づきと和解と許し、忙しすぎた父親との葛藤から受容・共生に至るまでの話を絃子さんはしてくれました。

谷本清牧師は、広島の復興に尽力しただけでなく、1955 年に 25 名の「原爆乙女」たちを米国に派遣し、整形手術を受けてもらうプログラムを推進した人でもありました。絃子さんは、エノラ・ゲイの副操縦士だったロバート・ルイス大尉と出会った時の話もしてくれました。一度聴いたら、絶対に忘れられない感動的な話でした。一度でも会うと彼女のことを忘れられなくなる――絃子さんはそのようなタイプの人でした。

最初の出会いから数年間、絃子さんは「平和の旅」の広島の部分に参加されただけでしたが、それだけでは満足できなくなり、最後まで参加していただけないかと絃子さんをお願いしました。おかげで絃子さんは長崎の旅にも参加され、後には京都でのセミナーを含め、全行程に同行されるようになりました。

1998年から長崎を訪問地に加えることが始まりました。長崎を訪問するために、旅行期間を3日ほど長くする必要がありましたが、異議を唱えた者はいませんでした。旅行期間を長くしてほしいと希望する学生のほうが圧倒的に多かったのです。ただし旅行期間が長くなると、コストアップとなります。予算の関係で、支出を最小限にとどめる工夫が必要となり、立命側の協力も仰ぎました。

長崎での体験は、広島とは異なる趣があります。広島の平和資料館よりも長崎の原爆記念館のほうが身近に感じられ、インパクトがあると評価する学生が多いように思われます。被爆式典から受けた印象も、長崎のほうが身近に感じられ、より深く心に刺さったと語る学生が多いように思います。

両都市で多くの被爆者と会い、体験を聴いてきました。被爆者の話は実に多様性に富んでいますが、どの被爆証言を聴いても、戦争と平和にかかわって、ある普遍的な真実を発信される点では共通しています。生と死、受難と回復のプロセスを歩む中で、どの被爆者も、信じられないほどの恐怖を目撃し、生き残ってこられたのですが、何か達観した神々しさが滲み出てくる人が多いのです。原爆を投下した米国にたいする怒りや憎しみを昇華させ、愛と希望に変えた人が多いのです。被爆者の人生の目的は、米国への復讐ではなく、核兵器の不吉な影を地上から一掃することに昇華しています。「こんな苦しみは誰にも味わせたくない」、「ノーモア・ヒロシマズ、ノーモア・ナガサキズ、ノーモア・ヒバクシャズ」と彼らは訴えます。被爆者の夢は、生きている間に核兵器が廃絶された世界を見ることです。ですから、紘子さんの証言が示すように、人に感動を与え、前向きにさせ、元気づけることができるのです。

私たちのプログラムは、たえず改変され、改善されてきました。最近の事例を挙げると、山根和代教授に引率されたグローバル・スタディーズ専攻のグループが合流され、新たな活力となりました。

バンクーバーのピース・フィロソフィーセンターを主宰するサトコ・オカ・ノリマツさんの参加によっても、新たなパワーが生まれました。サトコさんといえば、米国に占領された沖縄の諸問題に関する国際的な専門家ですが、11回にわたって、カナダから自費で「平和の旅」に参加してくれています。君島東彦教授、クロス京子教授、ヴィンセント・イントンディ教授の貢献も特筆すべきです。ヴィンセントは、大学院生時代以来、4回にわたって「平和の旅」に参加しただけでなく、自分の教え子たちを「平和の旅」に送り出し、『核爆弾に抗するアフリカ系アメリカ人たち』という重要な著作を公刊しています。

愛児の成長を見守る父親のように、アツシと私とは、23年の間、このプログラムが成長し、変貌していく様子を誇らしく見守ってきました。この素晴らしい「平和の旅」に私は300人を超える米国の学生とともに参加してきました。藤岡先生のほうも、立命館大学、立命館アジア太平洋大学から、ほぼ同数の学生を参加させてきました。

米国・日本だけでなく、ベトナム・中国・カナダ・韓国・フィリピン・マーシャル諸島など、世界各地から学生がやってきました。職業経歴も実に多彩でして、米海軍の現役の兵士もいましたし、平和活動家、福音派キリスト教の説教師、法律家、労働運動の活動家、高校生、年金生活者、核問題専門家、高校大学の教員、心理専門家、歴史家も参加してくれました。

今年のノーベル平和賞の受賞式で感動的な講演をされたサロー・セツコさんも、私たち

の旅で講演してくれました。被団協事務局長の田中熙己さんや谷口すみテルさん、下平作江さん、ジョナサン・シェル、ダニエル・エルスバーグ、広島市長だった秋葉忠利さんや平岡敬さん、広島市立大学の田中利幸さん、『はだしのゲン』作者の中沢啓治、鹿児島大学の木村朗教授、広島平和文化センター前理事長のスティーブ・リーパー、キャリー・サリバン、マックス・ポール・フリードマンさん、国際司法裁判所次席判事だったクリストファー・ウイマントリさん、2013年夏に広島と長崎で私たちの旅に参加してくれたアカデミー賞受賞のオリバー・ストーン監督などなど、説得力に富み、パワーに満ちた人々と出会うことができました。また私たちの旅は、日米両国の新聞・テレビの取材の対象となり、無数の報道がなされました。

「平和の旅」を「生き方を変える」経験だったと米国の参加者が語る時、それは社交辞令ではありません。たとえば旅に2回参加した Nick Rothさんは、ハーヴァード大学のケネディスクールで活躍していますし、3回参加した Eric Singer 博士、早逝されたインド出身の Uday Mohanさんは、反核・平和運動に積極的に取り組みましたし、ユタ州ソルトレイク市から参加した Mary Dicksonさんは、米国のヒバクシャ(ネバダ核実験場の風下住民)のリーダーとして活躍しています。この旅がきっかけとなり、博士論文のテーマを核問題に変更した学生もおれば、旅への参加がきっかけとなって、勤務する高校や大学で、若者に広島・長崎の核惨事について教えだした者もいます。たとえ平和と軍縮の追求を自らの職業にしない人でも、ヒロシマ・ナガサキの精神を身につけ、旅の体験を人生の指針にして生きていくことでしょう。

23年間の「平和の旅」の成果と収穫には格別のものがあつたことは疑いありません。

23年間の平和の学びの成果

クロス京子

広島と長崎に原爆が投下されてから72年の月日が流れた。この間、核兵器は相互確証破壊をもたらす「使えない兵器」ながら、最も有力な抑止力として、その製造・保持が正当化されてきた。世界で唯一の戦争被爆国である日本も、核兵器の廃絶を訴えながら、他方では、古くはソ連、中国、今日では北朝鮮の脅威に対抗するため、自国の安全保障をアメリカの核の傘に依存している。しかし、近年核兵器の近代化や小型化が進み、今や核兵器が「使える兵器」として使用される現実味が増してきた。北朝鮮が核開発を推し進める中、不測の事態が起きかねない状態が続いている。緊迫する東アジア情勢を背景に、日本や韓国では核武装論が聞かれるようになった。

2017年は、その一方で、核兵器の非人道性がかつてなく議論された年でもあつた。7月に採択された核兵器禁止条約は、核兵器のおそろしさを訴える市民社会の粘り強い運動の

成果であり、それを推進した核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）にノーベル平和賞が与えられたことは、核兵器のない世界の実現を目指す、多くの名もなき市民の希望を託すものであった。この運動をけん引したのが、被爆者の強い願いであったことは言うまでもない。そして、世界各地で核兵器廃絶を訴える被爆者の声に耳を傾け、活動を支えたのが 20 代、30 代の若者であった。戦後世代にとって、原爆投下は歴史的事象である。しかし、被爆者にとっては今なお鮮明な過去の記憶である。核兵器廃絶を訴える市民運動は、この痛ましい記憶を継承し、被爆者一人一人の体験を歴史として残す試みといえよう。

こうした核兵器廃絶運動を下支えしてきたと言えるのが、本プログラムを 23 年にわたり指導された、藤岡 惇先生、ピーター・カズニック先生、近藤紘子さん、乗松聡子さんである。日本とアメリカの大学で学ぶ若者たちに、被爆者の体験を生で聞き、原爆資料に触れる貴重な機会を提供された。10 日間寝食を共にした日米の学生は、国際交流という枠を超えて、自分たちが生まれる前の世代が行った戦争にどう向き合うべきか、記憶と歴史の中間点で答えのない問いに向き合い、ともに苦悩した。何を歴史から学ぶべきか、それぞれに大きな課題を得た夏であったと思う。一人一人の声は小さくても、自分たちに何かできるのではないかという気付きの旅となったであろう。

世界中で排外的で不寛容な風潮が強くなっている。しかし、戦争被害者の苦しみ、悲しみに、「私たち」と「彼ら」を区別するものは存在しない。話す言葉や文化、国籍が違って、子を亡くした母はみな嘆き悲しむ。本プログラムは被害国、加害国という立場を超えて、戦争被害者に心を寄せることで、排外主義を否定し、同じ人間として平和追求のための連帯を学生の間で促す取り組みであった。

本プログラムを修了した何百人という若者が、核兵器廃絶運動を支持し、未来の活動を担っていくと確信している。23 年の長期にわたり、学生の学びのために素晴らしいプログラムを計画・運営してくださった、藤岡先生に心からの敬意を表したい。今後、この取り組みをどのように継承していくべきか、私自身も多くを学んだ旅であった。

この時、あの場所、私の祈り

近藤紘子

思い返せば、この 23 年の間、あつと言うまに時は流れ、素晴らしい出会いの数々が走馬灯のように、私の頭を駆け巡っております。

私は、このセミナーに加わる前は、幼児問題に関わり、親に恵まれない子と子に恵まれない親の為に、国際養子縁組を手がけてきました。戦後の原爆孤児達の「精神養子縁組」をモデルに、これを発展させ、時代にそった形での縁組の橋渡しをしていたわけです。

それと平行して25年間“Children As The Peacemakers”の国際相談役として世界の子どもたち(小中高生)と世界を回り、各国のリーダー(首相、大統領等)に平和な世界になるようにと子どもたちが訴える活動に関わっておりました。

この平和セミナーに関わることによって、今度は大学生たちとの平和の旅が始まることとなりました。きっかけは、1996年。広島在住の母から「アメリカン大学の先生が学生さんたちを連れて再び広島に来られると新聞に出ていますよ」との電話でした。アメリカン大学を卒業してから二十数年がたっていましたので、嬉しさのあまり飛び上がらんばかりの喜びでした。早速、君島東彦先生(当時北海学園大学)に連絡を取りました。忘れもしません。広島のそごうデパートの前でのピーター・カズニック先生との初めての出会いでした。お目にかかったことが無いのに、私にとって旧友と出会ったような喜びでした。その出会いを皮切りに初期のセミナーをピーター・カズニック先生、藤岡惇先生に私を加えて頂き、弥次喜多道中のような三人組が動き始めました。知識に溢れ、人脈のある、お二人に「助手」(?)として、私を加えて下さり、多くを学ぶことができました。お二人よりもちょっと年上のお姉さん役です。ピーター・カズニック先生と藤岡惇先生の名コンビがおられなかったら、このセミナーは出来なかったと思います。

ピーター・カズニック先生、藤岡惇先生、君島東彦先生、藤田明史先生方の男性方に素敵なレディのお三人、乗松聡子さん、山根和代先生、クロス京子先生が加わりました。年がたつに連れ、先生方も増え、家族が大きくなるように、このセミナーに関わる人たちも増えてまいりました。

面白いことがありました。ある年のSC(スチューデント・コーディネーター)の女子学生たちが「紘子さんのスカートを引っ張る会」を作ってくれたのです。何かといえば、私が年をとり、おかしいことを言い始めたら、「ちょっと、紘子さん」と、スカートを引っ張って注意をしてくれる人たちの集まりだと聞かされました。何と嬉しい事か。本当に多くの素晴らしい若者との出会いが始まりました。

大学生たちが、このセミナーを通し、広島・長崎の被爆者があの日どのようにして生き残ったのかを自分の目で見、自分の耳で聞くことは、どんなに価値あることかと思います。この機会を通して語り継ぐ者となってほしいと願っています。幸いにも私の話を聞いてくれた大学生たちは、月日を経て、今度は教師や准教授になられ、若い人たちに伝え、語る人となり、この私をまたもや用いてくれるようになっていきます。このような学びの場に接することは、大きな喜びとなっています。こうして語り継がれることは、このセミナーの素晴らしさであると感じています。

生き残った被爆者は、「核兵器の無い世界」、「核廃絶」の実現を望んでいます。しかし世界を一度に変えることはできません。次の時代を担ってくれる人たちに訴えます。この「人から人へ」の精神こそが、「核兵器の無い世界」、「核廃絶」へと導いてくれる原動力だと。これからも「このセミナーに幸あれ」と祈り、願っています。

(日本キリスト教団三木志染教会)

被爆者の言葉を胸に、大日本帝国の侵略の歴史に向き合う

乗松聡子

私は2006年当時、カナダ・バンクーバーで子育てをしながら地元の大学で異文化間コミュニケーションを教える仕事をしていたが、その年の夏に開催された「世界平和フォーラム」で日本から参加していた藤岡惇先生と知り合った。その年の夏広島を訪ねた際に、立命館とAUの「平和の旅」が企画された被爆証言会の「助っ人通訳」を藤岡先生から依頼された。これがこの旅との出会いであった。

証言に立ったのは「原爆乙女」の一人でもあった山岡ミチコさん。15歳のときに被爆し火傷で顔にケロイドを負い、「お化け」と言われたときの気持ちを訳したときの胸の痛みを覚えている。時は、原爆投下記念日の前々日の8月4日の夕刻。国際会議場の一室での被爆証言は、今にして思えば、録音か録画しておけばよかったと悔やまれる。その晩、山岡さんを囲んで、楽しく食事会をし、山岡さんは機嫌よく帰宅なさったのであるが、2日後の8月6日の原爆祈念式典の直後に脳梗塞に見舞われてしまったからだ（山岡さんは2013年死去）。

2007年から2016年までの10回はおもに通訳として全期間参加したが、自分にとってやはり一番心に残ったのは被爆者の方々の通訳であった。焼け跡で黒焦げの母を見つけて、「おかあちゃん」と手を差しのべたら、ぼろぼろに崩れてしまったと語った下平作江さん。背中全面を焼かれ、うつぶせの状態ですぐに2年近く寝たきりであった谷口すみてるさん。医療関係者がきょう死ぬか、明日死ぬかとささやきあっていたのを聞きながらも生き延びた（谷口さんは2017年に死去）。倒壊した家の下敷きになって動けなくなった母親をどうすることもできず、迫りくる火の手の中に母を置いて逃げなければならなかった沢田昭二さん。母のためにもと勉学に励み、物理学者になって、今も核産業や政府が隠蔽し続ける原爆や原発の被曝問題を追及し続ける人だ。

これらの被爆証言の通訳は、感情がこみ上げ、通訳を続けるのがときには難しくなるが、一度完全に抑制できなくなったのが2011年、『はだしのゲン』の中沢啓治さんのときだった。『ゲン』に描かれているのと同様、家の下敷きになった父、姉、弟が火に焼かれる中、身重の母と中沢さんは、ちぎれる思いで逃げた。母は、弟が「お母ちゃん、熱いよ！熱いよ！」と叫ぶ声を聞きながら逃げなければならず、生涯その叫びは耳の奥に残っていた。この証言の通訳で号泣してしまった私は、福島医科大学から参加していた大学生からハンカチを借りて乗り切ったことを覚えている。中沢さんは翌年2012年の年末に亡くなった。

通訳とは、話者の物語が知的次元だけではなく体全体に入ってくるような体験であると思う。だからこそ、これらの被爆者の体験は私の体の一部になっているし、被爆者の亡き後も体験を継承する責任を私は負っていると思う。

被爆者から受け取った体験はもちろん被爆体験だけではなかった。特に中沢さんの話からは、戦時中から反戦を貫き投獄、拷問された父親の影響を強く感じた。自らの被爆体験だけではなく朝鮮人の隣人が被った差別、天皇の戦争責任、皇軍が朝鮮人や中国人に行っ

た蛮行の数々に真正面から向き合う人であった。この中沢さんの視点こそが、私が10年余の広島と長崎とのかかわりを通じて育むことのできた、原爆にいきつくまでの大日本帝国の侵略と植民地支配の歴史を直視する姿勢であった。

日本の「平和教育」は原爆投下から始まるといっても過言ではないぐらい、まだまだ被害者史観中心のものである。私たちの旅は長崎の朝鮮人原爆犠牲者追悼集会や、「岡まさはる資料館」に行くことで日本人中心史観から脱する試みをしてきている。立命とAUの旅は、一端は終止符を打つことになるが、今後このような旅を再び行おうとしたら、いま以上に、侵略の主体であった広島の第五師団や軍需産業のメッカである長崎の歴史と現状も併せて学ぶのがよいのではないかと思う。戦後「日米安保」の大規模軍事拠点であり続けている広島・長崎両都市とその周辺の現実も共に学びたい。

慰霊碑の真横には巨大な日の丸の旗が立っている。この旗も、かつて別々の機会に韓国人と中国人の仲間から、「国際平和を誓う場所にはそぐわないのではないか」と言われたものだ。毎年8月6日慰霊碑前で開催される平和式典で朝鮮人被爆者のことが語られることはほとんどない。広島の慰霊碑は日の丸とセットで「ここは日本人の聖地なのだ！」と言っているような気がする。「唯一の被爆国」と言うのが好きな日本人の「被爆ナショナリズム」を象徴している。

被爆者の言葉を心と体に刻みながら、今後はこのような問題意識をもっと深めながら広島と長崎に向き合っていきたいと思う。たくさんの学びと気づきを与えてくれた立命・AUの旅に心から感謝の意を表したい。

(ピースフィロソフィー・センター代表、カナダ)

第6章 教訓と展望

『『大国』と呼ばれる国々が核の惨事へと私たちを再び導こうとしているなかで、恐れの中かで無為に座すことを私たちは拒否します。私たちは立ち上がったのです。核の惨事とはどのようなものであったのか、本当の物語を語り始めたのです。核兵器と人類とは決して共存できないことを示すために。『諦めるな！、動き続けろ！、光が見えるだろう。そこに向かって這っていけ！』72年前に家の下敷きとなった私を、核の業火から救ってくれたこの『呼びかけ』を胸に刻んで」

(サロー節子、2017年12月10日のノーベル平和賞受賞演説から)

1) 23年間持続できた理由

米国からの参加者は、往復の旅費を含めると60-80万円、立命生だと、6万円ほどの費用負担を覚悟せねばなりません。しかも酷暑の8月上旬に11日間の長丁場です。このような悪条件にもかかわらず、なにゆえこのプログラムが900名の参加者を集め、23年間も続くことができたのでしょうか。以下の6つの要因が支えてくれたように思います。

1. 切実な問題を考えるアクティブ・ラーニング

「核・ミサイル危機をどう克服したらよいのか」、「朝鮮半島・東アジアの非核化をどう実現したらよいのか」——この問いは、幾万もの人が自分の人生を賭けないことには正解が出てこない、死活的に重要な問題です。この問いに、旅を通じた現場の調査にもとづいて、アプローチできる魅力が大きかったと思います。

2. ディープな学術研究に支えられた学びの魅力

ピーターは、元来は核の文化史を探究する歴史学者ですが、「現皇統下の君主制の存続を約束していた『ポツダム宣言』草案12条末尾の一節をトルーマンたちは削除し、原爆を投下するまでは日本の降伏を許さなかった。日本を降伏させたのは、原爆投下ではなく、ソ連の参戦であった」という説の主唱者の一人です。この立場に立って『オリバー・ストーンが語るもう一つのアメリカ史』という映像作品全5巻と700ページを越える大著を完成させ、世界的に大きな反響を呼びましたし、旅の途中では、オリバーはじめ国内外の専門家を招き、何回も「市民開放講座」を開いてきました。こうした学問的探究の最新の成果に支えられた学びができるという魅力も大きかったと思います。

3. ピーターの頑張りが作り出した、国際的な学び

この間に立命関係の学生数を上回る 320 名の学生・市民をピーターが日本に引率してきたので、国境を越えた国際的な視野で、「核と宇宙時代の平和創造はどうあるべきか」という問題にアプローチすることができました。国際的な視野の広がりから得られたパワーは、乗松聡子さんたちの質の高い通訳の力によって支えられました。11 日間、英会話の嵐にさらされますので、英語能力を高めたいと願う学生たちを魅したのも道理だと思います。

4. 民主主義のパワーを学ぶ——「サンフラワー盟約」の財政民主主義の実践

500 年余り前に、ピリグリムファーザーズたちがメイフラワー号に乗って、ボストン近郊のプリマスに上陸しますが、その前夜に船内で採択された「メイフラワー盟約」が、米国「建国」の原点、米国憲法の最初の母体になったとされます。その故事に学び、旅行団の「憲法」の制定が旅の成功に向けた第一歩となります。

「建団式」の場で合意・採択された「サンフラワー盟約」の核心は、「共通基金」の設立と財政民主主義の実践の誓いです。私たち旅行団員は全員が平等の議決権をもつことを確認し、旅行に必要な経費を賄うために「共通基金」の設立を議決します。教員層を含む全参加者から平等に 1 万円を徴収し、残余金ができれば、解団式の中で返還すること、基金の運用・管理は先学者（SC）の一行が行うことに合意するのです。

5. 教員と学生をつなぐ SC（先学者）集団が発揮する無類の調整能力

SC とは、過去の参加者から名乗り出た 5 名の先輩リーダーのこと。学生調整者（Student Coordinator）、略して SC と呼んできました（大学として交通費などの援助をしています）。彼らに旅行の運営・実務の大半を任せます。「共通基金」を管理する SC の力量がアップしてくるに従い、この科目の実体は、上級生が企画し経験を伝承していく「学生サークル」に近いものに変容し、私やピーターは「教員」から「コーチ」に役柄を変えていきました。

6. 気高い生き方——アンパンマン精神を学ぶ

アクティブ・ラーニングを発展させ、学生を成長させようとするれば、「現場の調査にもとづく学び」のレベルを超えて、学習＝研究共同体を自治するパワー獲得のための学びへ、さらには「気高く美しい生き方」を学び、実践するレベルへと、自ずから高まっていく必然性があると思います。

美しい生き方のモデルの一つは、近藤紘子さんでしょうか。フロイド・シュモーやバーバラ・レイノルズ、サロー節子さん・笹森恵子・山岡ミチコなど、流川教会に関係した被爆者の生き方からも大きな示唆が得られるかもしれません。乗松さんも触れられていますが、マウント・サイナイ病院で整形手術を受けた原爆乙女の一人の山岡ミチコさんの人生が、WFC の HP に載っていました（資料—23 参照）。

「スヌーピーとチャーリー一家」の絵柄のタオルを私の孫娘が保育園で使っていました。

このタオルが「平和＝友愛家族」のシンボルマークとして人気を博し、旅行団の先頭に翻る団旗となりました。5－6 年の間、この旗が、旅行団を統合する「象徴」の役割を果たしていたのですが、2014 年のある日、スヌーピーが失踪し、行方不明となる事件が起こりました。そこで 2016 年から、アンパンマンを描いた別の保育園のタオルを団旗の絵柄に採用したところ、再び、若者たちの人気を集めました。そこで、この 2 年間ほど、アンパンマンフラッグが旅行団の先頭に翻えるようになりました。陽気で正義感が強く、自分の体を犠牲にしても飢えた子供を救おうとするアンパンマンが、日本の若者だけでなく、アメリカの若者も大好きです。

世界を救うのは、アンパンマンのような心を持った人なののでしょうか。明確な答えはありませんが、23 年間の私たちの旅のなかで、「どんな人間に成長すれば、もっと美しく、正義にかない、平和な世界が創造できるのか」――旅に同行した若者たちは、様々なインスピレーションを得たのではないのでしょうか。



「はだしのゲン」の作者の中沢啓治さんご夫妻とともに撮影した写真を紹介します。前列には右から近藤絃子、中沢さん夫妻、ピーターが並んでいます。後列右の乗松聡子さんと私がもっているのがスヌーピーの団旗です。私の隣が広島市立大学の田中利幸さん。私たちの旅行団がなければ、絃子さんとユキさん（田中教授）を結ぶ接点はなかったのではないかと思います。中沢さんが亡くなられる 1 年半前のことでした。



片足鳥居で有名な長崎の山王神社が頒布している手ぬぐいの絵図。
プログラムの終結を記念して、参加者に配布したものの一部です。

2) 展望

新自由主義改革の時代とともに経済的格差が再拡大する時期を迎え、今日では世界で最も豊かな 42 人が、貧しい方の半分（36 億人）に匹敵する資産を所有しています。このような超格差社会の出現が、デフレ不況と戦争を招く重要な原因となっています。また化石燃料の大量使用が、地球温暖化・異常気象の激化をもたらし、食料・環境危機を招き、紛争を激化させていることも確かでしょう。

冷戦終結後、米国は、宇宙衛星編隊と最新のネットワーク技術を用いて、新型の戦争システムを開発してきました。米国の軍産複合体は、新型戦争の威力をまずはイラク・中東を舞台に実証しようとしたのですが、結果は予想を裏切りました。莫大な戦費を費やしながら、ロシアを後ろ盾とするイラク・シリア・イランのシーア派国家連合を生み出し、中国の台頭を招くことになったからです。米国の覇権衰退への危機感からトランプ政権が生まれましたが、情勢はいつそう不安定となっています。

東アジアでは、68 年目に入った朝鮮戦争が再び、火を噴く可能性が出てきました。北朝鮮の発する朝鮮戦争終結の呼びかけを米国は一貫して拒否してきました。奇襲攻撃から自衛するため、北朝鮮は核ミサイルの開発・配備に走ってきたのですが、北が獲得した「核抑止力」を放棄するよう、米国は、日本とともに軍事圧力を最大化しようとした結果、核交戦に至りかねない、一触即発の危機に直面しています。陸上イージスをはじめとする核ミサイル防衛網を築いていくと、宇宙を舞台に未曾有の核軍拡競争が始まる可能性があります。原発をターゲットとする自爆テロや戦争がおこれば、日本列島は無人化の危機にさらされるでしょう。「核の時代」とは、人が戦争を絶滅しないかぎり、戦争のほう人が人を絶滅させるーそれ以外の中間的選択肢が消え去ってしまう時代のことなのでしょうか。

いま私たちは、次のような問いに直面しています。専守防衛などの制約を取り払い、改憲を行い、日米の軍事的一体化を強めていけば、結果的には日本と世界の平和・安全・経済繁栄を増進することにつながるという主張が一方にあります。他方、この道は人類共滅に通じるので、とるべくでない。むしろ外交交渉で、朝鮮戦争の終結＝平和協定の締結に全力を傾けるべきだという主張もあります。しかし後者の道をたどっても、北朝鮮の核ミサイル放棄、東北アジアの非核地帯づくりにつながる見通しがあるのでしょうか。総じて、東アジアにおける核戦争の危機を回避し、深く沈殿した不信と紛争の連鎖を断ちきり、平和・相互理解・共生の道を拓いていくためには、何をなしたらよいのか。2017年度の旅は、この問題を世界の若者とともに考えて来た旅だったと思います。

「世界終末時計」というものがあります。核軍拡に批判的な立場をとる核問題の専門家の科学雑誌 *Bulletin of the Atomic Scientists* が 1947 年以来、世界が核戦争の危機にどれだけ近づいているかを評価するために毎年発表しているものです。2018 年 1 月 26 日に発表された最新の評価では、1 年前から 30 秒、前に進められ、現状は人類共滅の 2 分前と評価されました。人類は 1947 年以来、もっとも核による共滅に接近していると、専門家たちは評価し、警告したのです。

現在、日本では北朝鮮や中国・ロシアに核ミサイルをブロックし撃墜するための陸上イージス基地の建設が始まろうとしています。核戦争には勝者がいるのか、一方勝ちが可能なのか、それとも関係者、ひいては人類、地球生命系が共滅するものなのか。核ミサイル防衛の盾を備えた核兵器システムというのは、いざ交戦となったばあい一方勝ちできるという意味で「戦争抑止」装置としてワークするのか、それとも「人類共滅」装置にすぎないのかが問われています。

生き残りの脱出口を求めて必死の模索

今日、核戦争・宇宙戦争の恐怖が、朝鮮半島・日本、そして世界を覆い、脱出口を求める必死の模索が各地で始まっています。

「サンフラワー」という言葉の産みの親でもあるクリントン政権時の国防長官のウィリアム・J・ペリー（浦賀にやってきたペリー提督の子孫です）は、『核戦争の瀬戸際で』（松谷基和訳、2018 年、東京堂出版）という本を書き、核抑止論の虚妄性を力強く訴え、北朝鮮と米国との核ミサイル危機の軍事的解決の危険を訴えています。

2017 年のノーベル平和賞は、核戦争の実相を伝える被爆者の証言を伝え、市民社会の諸組織を束ね、「核兵器禁止条約」の制定に貢献した「核廃絶国際キャンペーン」（ICAN）に授与されました。この動きも、人類共滅への危機感の所産だと考えられます。

ピーター自身、日本被団協をノーベル平和賞の候補に推薦する運動の元締め役割を果たしてきました。川崎 哲さん、キャサリーン・サリバンさんを始め、多くの関係者は、私たちの「平和の旅」の講師に立ち、通訳や助言者を勤めてくれた人たちです。

カナダ在住のサロー節子さんは、広島女学院で学び、近藤紘子さんの流川教会の日曜学校で英語の先生をされていた人ですが（資料—24 参照）、2015 年の旅では広島で感動的な講演をしていただきました。

サロー節子さんの母校の広島女学院高校の生徒や先生方は、平和活動に活発に取り組んでいます。今回の旅でも、8 月 5 日のバスに同乗していただき、シュモアハウスや流川教会、

縮景園をいっしょに回りました。**資料—25**は縮景園の正門前でとった写真です。

昨年 12 月 10 日のノルウェイの首都オスロで開かれたノーベル賞授賞式が行われ、被爆者を代表して節子さんが、第 6 章冒頭に掲げたようなノーベル賞受賞演説をされました。目を閉じて演説に聞き入る田中熙己さん（日本被団協代表委員）の表情は、メディアで伝えられました（**資料—26**）。

昨年末のノーベル平和賞の IGAN への受賞を記念して、オスロのノーベル平和センターでは「核爆弾を禁止せよ」という特別展が始まっています。被爆 50 周年、同 70 周年には、AU を会場にして「原爆展」が開催されましたが、国外で開かれる大規模で影響力の大きな原爆展としては、オスロが 3 度目の試みです。5 年間にわたって GS を率いて、私どもの「平和の旅」を担っていただいた山根和代先生が、立命館大学平和ミュージアム名誉館長の安斎育郎さんとともに、同ミュージアム所蔵の「被爆資料」を提供するなど、オスロでの原爆展の開催に協力されました（詳しいことは**資料—27**を参照してください）。

開館 50 年を迎えた丸木美術館が 2017 年度の谷本清平和賞を受賞したのも、同様の模索の所産なのでしょう。岡村幸宣学芸員による谷本賞受賞記念スピーチも掲載しました（**資料—28**を参照）。

ピーターや絃子さんの願い

私たちが探究してきたテーマが、いっそう重要となる時代を迎えています。このような時に、本プログラムは休止（終結）せざるをえなくなりました。

昨年 8 月 30 日付けで『読売新聞』広島版が「アメリカン大学と立命大共同セミナー休止」と報じ、「被爆実相学ぶ場の継続を」と訴えました（**資料—29**）。確かに「休止」は残念ですが、やむをえません。

23 年間、ペアを組んできたピーターは、なお活力にあふれており、被爆地訪問プログラムを続けたいと念願しています。AU では定年制が廃止されていますので、あと 10 年は続ける気持ちでいるようです。近藤絃子さんも乗松聡子さんも、同様の気持ちでしょう。

日本のどこかで、この事業を引き継ぐ意志をお持ちの方はおられませんか。そのような志をもった方と出会うこと——それが本書を編んだ目的の一つにほかなりません。

この種のプログラムが誰かによって継承され、どこかで新たな芽をふき、もっと「個性的な方向」に進化し、別種の、もっと美しい花を咲かす日が来ることを、そしてこのような無数の取り組みを介して「核による共滅の危機」からの脱出口を人類が見出すことを望んでいます。

「諦めるな！、動き続けろ！、光が見えるだろう。そこに向かって這っていけ！」——ノーベル平和賞授賞式でサロー節子が放った「魂の言葉」を胸に刻んで。

謝辞：初代のアンパンマンは、本プログラムの産みの母——直野章子さん（広島市立大学広島平和研究所教授）にほかなりません。直野さんの貢献に感謝します。

（文責 藤岡 惇）

資 料 集

原爆の図、米の心に響け

2015・6/16 AM (朝日、朝刊)

丸木美術館の6作品、ワシントンで初の展示

米ワシントンのアメリカン大学美術館で13日夕(日本時間14日朝)開幕した原爆展で、原爆の図丸木美術館(東松山市)が所蔵する、水墨画家の丸木位里(1901~95)と洋画家の俊(1912~2000)夫妻が描いた連作絵画「原爆の図」の展示が始まった。被爆70年の今年、原爆を投下した米国の首都で初めて展示が実現。来場者が熱心に見入っていた。12月まで米国内を巡回する。

12月まで米国巡回

「原爆の図」は原爆投下直後、苦しむ子どもや女性らの姿が描かれている。海外では「ヒロシマ・パネル」と呼ばれ、これまで世界20カ国以上を巡回し、キノコ雲の下で何が起きたかを伝えてきた。

さつ。展示を見ていたペリ・ローパーさん(46)は「とても感動した。(丸木夫妻が)朝鮮人への差別も描いていることに驚いた」。展示を企画したフリープロデューサーの早川与志子さん(68)は「戦争を知らない若い世代にも見てもらいたい」と話した。

「原爆投下が戦争を早く終結させた」との原爆観がなおも根強いとされる米国。展示の受け入れを決めたアメリカン大のピーター・カズニック教授は「ピカソのゲルニカに匹敵する作品で、原爆の犠牲になるのは人間なのだという大切なメッセージを伝えている。美しく感情に訴えかける作品を見ることで、アメリカ人は心を動かされるだろう」と期待を込める。

8月まで同大で展示された後、9~10月にボストン大学美術館で、11~12月にニューヨークの展示施設「パイオニアワークス」での展示が決まっている。

開幕式で、原爆の図丸木美術館の小寺隆幸理事長は「展示によって、より多くのアメリカ人と核廃絶への思いを共有したい」とあい

(ワシントン=清宮涼)

展示された「原爆の図」10部「署名」とアメリカン大のピーター・カズニック教授(左)、早川与志子さん



展示された「原爆の図」の前で、教会の合唱団による平和への思いを込めた歌も披露された。いずれも13日、米ワシントンのアメリカン大



語る 原爆投下の国で

広島・長崎市、20年ぶり米首都へ

AM 米国のワシントンで6~8月、広島市と長崎市が原爆展を開く。70年前に原爆を投下した国の首都での合同開催は20年ぶり。核廃絶への道筋が見えない中、犠牲になった人たちの遺品や被爆者の証言を通じて、「核の非人道性」を訴える。



被爆体験を証言する山本定男さん
広島市中区



「考え変わる」 信じる83歳

1945年8月6日午前8時15分。広島県立広島第二中学校（現・広島観音高校）の2年生だった山本定男さん（83）は、晴れ渡った空を見上げていた。

そのとき、米軍のB29爆撃機が急旋回し、真夏の太陽に照らされた翼がきらりと光った。「グワン」。重たい音が響いた後、原爆が炸裂。爆心地から約2・5キロ離れた東練兵場（現・広島市東区）にいた山本さんは、すさまじい爆風で吹き飛ばされた。気づくと、辺り一面は火の海だった。

山本さんはその日、爆心地の近くで空襲による延焼を防ぐために建築物を壊す「建物疎開」の作業に加わるはずだった。だが、急きょ予定が変更。代わりに行った下級生たちが亡くなった。「一発の原爆で、無数の下級生が死んでしまった」。山本さんは長い間、体験を語る気持ちはなれなかった。

数年前、のどに病を患った。「人生の最後、何か役目があるかもしれない」。山本さんは核兵器の悲惨さを伝えることが残された仕事だと思い、2年前から広島平和記念資料館などを訪れる人たちに被爆体験を語り始めた。

米国から来た人は「米国のことをどう思いますか」「米国の大統領を告発するつもりはありますか」と次々と聞いてくる。核軍縮・廃絶が遅々として進まず、核保有大国の米国の関係が再び冷え込んでいく。米国内で核に対する関心が高まっているのではないかと。山本さんには、そう思える。

一方で、今月下旬にニューヨークで閉幕した核不拡散条約（NPT）再検討会議では、加盟国でまとめる最終文書の素案から「世界の指導者らの広島・長崎訪問」の文言が中国の反対で消えた。さらに最終文書も中東非核地帯構想をめぐる対立で採択されなかった。被爆者は高齢化し、70年前に起きた悲劇を語る人が少なくなっている。体験を語る際、「原爆が二度と使われないよう、今日の話を家族や友人に広めてください」と結ぶ山本さん。「米国の恨みつもりはありません。こちらから語りに行き、体験を聞いてもらったら、核兵器についての考えを変えてくれると思います」。そう願う、原爆展が開かれるワシントンの地に立つ。（岡本玄）

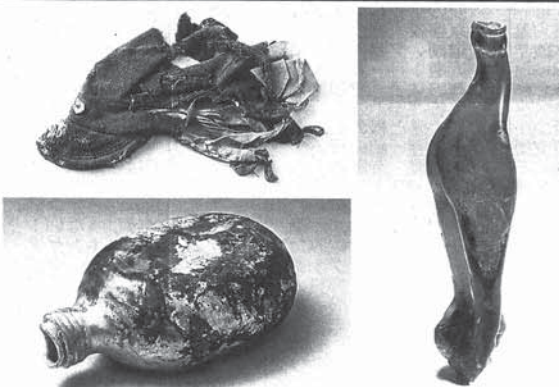
核と いのち を考える

子の遺品 中心に展示

「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」は6月13日〜8月16日、ワシントンにあるアメリカン大学の美術館で開かれる。被爆して亡くなった中学生の学生服、黒こげになった弁当箱……。子どもたちの遺品を中心に広島平和記念資料館と長崎原爆資料館が所蔵する25点を展示。原爆投下に至る経緯や今も続く放射線被害について説明する43枚のパネルのほか、水墨画家の丸木位里（1901〜95）と妻で洋画家の俊（1912〜2000）が描いた連作絵画「原爆の図」の一部も置く。山本定男さんも体験を語る。

広島市と長崎市は16カ国の45都市で合同原爆展を開いてきた。被爆70年に合わせ、アメリカン大学のピーター・カズニック教授（歴史学）から開催の提案があったという。広島平和記念資料館の志賀賢治館長は「なにが起きたのかを見て、考えてほしい」（国米あなただけ）

（上から時計回りに）原爆で亡くなった中学生の学生服、黒こげになった弁当箱、原爆で亡くなった13歳の少年が使っていた黒い水筒、折角シゲコさん寄贈、ぼろぼろになった動員生徒の帽子、吉岡満子さん寄贈、いずれも広島平和記念資料館所蔵



（朝日新聞、朝刊）
2015年5月29日

+Rな人

国際交流を通じて、
小さなコミュニティから
平和をつくる国際平和交流セミナー
スチューデントコーディネーター

田中志穂 さん（国際関係学部3回生）



日本人学生と外国人学生が、10日間の日程で京都や被爆地である広島・長崎を訪れ、それぞれの立場から戦争や平和について学び語り合う「国際平和交流セミナー〈広島・長崎プログラム〉」。今年で21回目を迎える同プログラムには、今回、アメリカン大学から23名、立命館アジア太平洋大学から4名、立命館大学から21名の学生が参加した。

田中志穂さんは、プログラムの運営補助や2ヶ国語でのしおりの作成などを担当するスチューデントコーディネーターを昨年に引き続き務めている。田中さん自身も、1回生の頃にプログラムに参加。アメリカだけではなく、当時プログラムに参加していた中国、韓国などの学生たちが「日本の侵略を止めてくれた」という原爆投下下へ肯定的な教育を受けていたということに驚いた。今まで原爆投下を肯定する意見を直接聞いたことがなかったこともあり、ショックを受けた。10日間のプログラムの期間で自分なりに整理しきれない想いがあったことから、翌年以降もスチューデントコーディネーターとして、このプログラムに関わり続けている。

プログラムは、はじめの2日間、京都で立命館大学国際平和ミュージアムの見学とともに、君島東彦・国際関係学部教授や山根和代・国際平和ミュージアム副館長、アメリカン大学のピー

ター・カズニック教授、NGO関係者による戦争や平和に関する講義などが行われた。ともに行動し、意見を交わすことでまず参加者間で友人関係を築くことからプログラムは始



ディスカッションを行う学生たち

まっていった。その後、広島や長崎では、平和記念資料館などの見学や平和祈念式典への参加、被爆者の方から体験談を伺う機会が設けられる。特徴的なのは、さまざまな人との対話や体験を通じて、日本だけではなく、中国、韓国、アメリカなど、さまざまな国が戦争で受けた被害について学んでいくことだ。このような体験を経て学生たちは、関わるすべての国を加害者であり、被害者にする戦争の二面性に気づき、一方的に自国の主張を語るのではなく、異なる立場からの主張も受け入れられるようになっていく。田中さんは「被爆者の体験談を直接伺って、たくさんの学生が涙を流していました。『正しい戦争なんてない』』ということを経験した全員が実感してくれたのだと思います」と、現地での学生たちの様子を語ってくれた。

このプログラムでは、「国際交流を通じて、小さなコミュニティから平和をつくる」をコンセプトにしている。「友人同士であれば、相手の痛みを感じることもできるし、傷つけたくないとも思います。国という大きなレベルではなく、友人同士という個人のコミュニティを広げていくことで、平和を築くことができると考えています」とプログラムの意義について語ってくれた田中さん。「『国』というフィルターを通すことで、実際に被害を受ける『個人』が見えなくなる」「『個人』が見えなくなること、誰かを傷つけることへのためらいがなくなっていく」。戦争はこうした感覚の麻痺の連続が引き起こす結果なのかもしれない。

今回のプログラムで国籍や価値観を超えて学生たちが掴んだ感覚が、これからの世界に平和をもたらすきっかけになることを期待したい。



広島平和記念公園で祈りを捧げる学生

日米学生ともに学ぶ平和

被爆体験聞く合同セミナー

日米の大学生が原爆投下について共に学ぶセミナーが今年も開かれている。立命館大とアメリカン大の学生が1日から、被爆者と対話。「原爆の日」の慰霊行事にも参加し、どうすれば核兵器の惨劇を繰り返さず平和を実現できるか議論している。「憎むべきは人ではなく、戦争」。被爆者の一人は両国の若者たちに訴える。

歴史観の違いも理解



日米の大学生に被爆体験を話す近藤さん(2日、立命館大)

には慰霊行事にも出席。参加者は21年間で約600人に上り、今年も42人が参加している。

同セミナーを監修する立命館大の藤岡淳教授は「世界各地で連日のようにテロや紛争が起きている影響もあり、学生の平和への思いは強まっている」と話す。オバマ米大統領が5月、現職としては初めて広島を訪問したことも学生の関心を高めたという。

「『あなたさああの原爆を落とさなければ、広島の人には死なずにすんだ』と幼い私は思っていました」。被爆者の近藤絃子さん(71)は2日、京都市の立命館大で、広島に原爆を投下した爆撃機「エノラ・ゲイ」の副操縦士、ロバート・ルイス氏(故人)と約60年前

に直面した時の気持ちを語った。対面は父と出演した米国のテレビ番組の場だった。後悔の念から涙を流すルイス氏を見てショックを受けた。「私が憎むべきは彼ではない。戦争を繰り返してしまつ人間の心だと気付いたので、声を震わせて話す」。

と、日米の学生たちは真剣な表情で聞き入った。両大学が合同実施するセミナーは戦後50年の1995年、アメリカン大に留学していた日本人学生の企画をきっかけに始まった。被爆地の広島と長崎を含め、10日間かけて被爆者や元広島市長らから話を聞く。原爆の日

「被爆者の話を聞いて原爆投下の真実が見えてきた」と話すのはアメリカン大の男子学生、ジェイク・エフロスさん(21)。米国では原爆投下で太平洋戦争を終えられたと学んできた。「戦争や核兵器の恐ろしさを痛感した。米国の教育が事実で

はないかもしれないと気付かされた」

立命館アジア太平洋大の西田安純さん(21)は「真珠湾攻撃の被害など知らないことばかりだった」と反省する。「米国

人が原爆投下の被害の実態を知らないように、日本人も被害者の視点でしか戦争を学んでいない。双方の価値観を理解しないと真の平和にはつながらない」と話した。

近藤さんはセミナーの初期から学生に話をしてきた。「次代を担う若い人たちが国によって異なる意見を互いに受け止めて、平和を作り上げてほしい」と願っている。

「思いやりの心 持って」

サダコの兄 中区で講演

16.8.6 毎日新聞(広島27(広島))



日米などの学生を前に講演する佐々木雅弘さん(右) 中区で

サダコの折り鶴で知られる佐々木雅弘さんの兄雅弘さん(元)福岡県が4日、中区のアステールプラザで日米などの学生42人を前に講演した。白血病で12歳で亡くなった雅弘さんについて「闘病中でも家族を気遣う思いやりの心があった」などと紹介した。

講演は立命館大(京都市)が1995年から毎年開くセミナーの一環。立命館大のほか、立命館アジア太平洋大、アメリカン大の学生が広島や長崎を巡り、戦争や平和について考えている。

【竹下理子】

米学生「投下、正当化できぬ」式典参列

16.8.6 読売(7)12A



平和記念式典に参列したマレーさん(右端)(平和記念公園で)中村隆撮影

平和記念式典に参列した米アメリカン大3年の米国人ジョナサン・マレーさん(20)は、オバマ大統領が献花した原爆死没者慰霊碑近くで「世界中の多くの人が広島に来て、核廃絶に向けた議論を続けることが必要だ」と語った。

同大学と立命館大が開催する戦争と平和について学ぶセミナーの一環で出席した。高校の授業では「原爆投下は終戦を早めた」と学んだが、日本側の視点も知るべきだと考えたという。今月1日から10日間の日

程で、原爆で肉親を亡くし、生死の境をさまよった被爆者の体験を聞き、広島平和記念資料館の展示を見学してショックを受けた。核兵器の恐ろしさを知り、「原爆投下は正当化できない」と思うようになったという。オバマ氏の広島訪問については「過去の大統領ができなかった素晴らしい判断だったが、米国内の世論への配慮から、強いメッセージは打ち出せなかった」と残念がる。帰国後は被爆地での体験を身近な人に伝えようと考えている。

米学生「人類に対する犯罪」

平和式典には、アメリカン大(米ワシントン)の学生19人も参列した。立命館大の学生らと広島・長崎を学ぶアロケラムの一環。被爆者の体験を聞き、アメリカン大2年のマシュー・シヤロニーさん(19)は「人々に対する犯罪」



「人々に対する犯罪」を。早朝、身元が分らない万人の遺骨が眠る原爆被爆者前で慰霊式にも立ち会った。被爆地を訪れて初めて、原爆は「人類に対する犯罪」と実感した。原爆を正当化する米国の教育を「恥ずかしいと思う」。9日、長崎の平和祈念式典に参列する。(広島県下)

国超え見えた戦争と平和

日米を中心とした五カ国の大学生が十日まで共に広島、長崎を訪れ、戦争や平和について理解を深めた。被爆者の声に耳を傾け、学生同士議論をしながら、米国の学生は「原爆は戦争終結を早めた」と授業で教

わった考え方に疑問を抱き、日本の学生は加害国でもある自国の歴史の側面を意識した。参加した日本人学生は「米の学生と共に学ぶことで、歴史的背景や教育の違いなどを学べた」と意義を語った。(鈴木啓紀)

学生たちは、立命館大(京都市、草津市)と米

アメリカン大が主催し今年で二十一回目となる平和交流セミナーに参加した四十二人で、一日から十日間一連に行動した。

「八月九日は、生きる苦しみの始まりでした」。

七日には、十歳の時に長崎市内で被爆した大塚一敏さん(への話に、学生たちが真剣な表情で聞き入った。投下の数日後、髪がかっぱのように抜け落ちたこと、救護所で地面に転がる性別不明の患者を見たこと

アメリカン大三年のジェイク・エフロスさん(三)は、中学や高校で「原爆は戦争終結を早めた」と教わってきたが「考えは誤りだった」と意識を変えた。来日前に文献を読み、疑問を抱き始めたが、被爆者の話を聞き「歴史的な面からも、モラル的な面からも

立命館大生ら 5カ国の学生 共に広島、長崎へ

9日の長崎の平和祈念式典を前に笑顔で語り合うエフロスさんと中村さん。長崎市の平和公園で



「許されない」との思いを強くした。立命館大三年の中村夏海さん(三)「草津市」は「戦争では、日本は被害国だが加害国でもあった」と考えるようになった。セミナーでの意見交換で、ある日本人学生が「日本に点状する戦争資

戦後71年
夏

料館の展示には、被害者視点しか示されていないものが多い」と嘆いたことに共感した。「真珠湾攻撃など、歴史的事実と向き合う必要がある」と意見を述べた。

原爆を投下した米国のオバマ大統領が現職として初めて広島を訪れた意義についても議論した。中村さんは「原爆投下への謝罪がないのは残念だった」と評価は厳しい。エフロスさんは「現職で訪問したことは評価するが、理想論だけで話に具体性がなかった」と中身に踏み込んだ。

十日間のセミナーを終え、政治家を目指しているというエフロスさんは「米国人として、日本人学生や被爆者から歓迎してもらい感謝している。在学中や卒業後の人生で、平和のために何ができるかを考えていきたい」と今回の経験を将来に生かすつもりだ。

立命館大と米アメリカン大生 軍縮の課題 理解深める



中村准教授(左)の説明に耳を傾ける立命館大とアメリカン大の学生

立命館大と米アメリカン大は8日、長崎市の長崎大文教キャンパスで「国際平和交流セミナー」を開いた。日米の学生は専門家の講義を聴講し、核軍縮の課題などについて考えた。

日米の学生約50人が参加。4～6日に広島市を、7日からは長崎市を訪れ、被爆証言を聞いたり原爆資料館を見学したりしてきた。

セミナーで長崎大核兵器廃絶研究センター(RECNA)の中村桂子准教授は、核兵器使用などを禁止する条約制定が国連作業部会で議

論されていることを紹介。「日本は被爆国でありながら米国の核の傘に依存し、禁止条約に反対している。こうした矛盾も考えてほしい」と指摘。アメリカン大のピーター・カズニック教授はオバマ大統領の広島訪問を考察し「オバマ氏は原爆投下を過ちと認めて被爆者に謝罪すべきだった」とした。

学生は9日の平和祈念式典に参加し、10日まで市内に滞在。立命館大3年の益田果歩さん(21)は「被爆地を見て回り、知らないことを学べた」と話した。(田下寛明)

「長崎新聞」2016年8月9日

きょう長崎原爆の日

16.8.9 西日本新聞 27 (長崎県版)

国連事務次長と論議

長崎大 学生がテロや軍縮テーマ

9日の平和祈念式典に出席するため長崎市を訪問しているキム・ウォンス国連事務次長(軍縮問題上級代表)が8日、長崎大で学生たちと意見交換した。テロや核軍縮、国連の役割など幅広い問題について意見や質問が飛び交った。



①長崎大などの学生たちと意見交換したキム・ウォンス国連事務次長(奥左)②被爆者の証言を聞く日米の大学生たち



ナガサキ
2016

テログループに流れている。困難な課題だと指摘。国連は教育や情報の格差解消など問題解決を図っていると説明した。

核兵器削減については「国連の唯一の武器は説得と外交。声」が必要だ」と話した。

(上野洋光、佐藤里佳)

参加したのは長崎大、立命館大、立命館アジア太平洋大、京都外語大のほか、米国のアメリカン大学の学生約60人。キム氏は、現在は紛争の9割がテロリストによる行為とし「将来への希望が見いだせない若者が

と話した。国連作業部会で議論している核兵器禁止条約制定について、キム氏は「核保有国の参加なしには実現できない。国連には強制力がないが非保有国との橋渡し役を果たしたい。核保有国を動かすような世論を盛り上げてほしい」と学生たちに呼び掛けた。

学生たちは7日には、長崎市内で被爆体験も聞いた。被爆者の大塚一敏さん(81)は「原爆で足にけがを負い、病院へ行くと、焼けて体の裏表の分からない人たちが床に置かれていた。人間と原爆は絶対に共存できない」と訴えた。

長崎を初めて訪れたアメリカン大学のジェイク・エフ・ロスさん(21)は「長崎の原爆の被害を知らなかった。今も被爆者が病気に苦しんでいると聞き、心が痛む」と話した。

(上野洋光、佐藤里佳)

2016.08.09 長崎新聞 (28面)

「若者の声 政治に届けて」

キム国連事務次長 学生と意見交換

長崎大



キム国連事務次長(左)と意見を交わす日米の学生—長崎大

長崎原爆の日の平和祈念式典に参列するキム・ウォンス国連事務次長が8日、長崎大文教キャンパスを訪れ、軍縮や国連の役割について日米の学生約60人と意見交換した。

キム氏が学生との交流を求め、長崎大核兵器廃絶研究センター(RECNA)が企画。同大のほか、被爆の実相を学ぶため長崎市を訪れている立命館大や米アメリカン大などの学生が参加した。

キム氏は国連の軍縮問題上級代表でもあり、核兵器を含む大量破壊兵器の脅威をやテロ対策などについて議論。「国連の究極の目的は

(田下寛明)

核廃絶

(6・8・10) 読売新聞西部 34 (社会)

「オバマさん生の声聞いて」

9日の平和祈念式典。日本原水爆被害者団体協議会

被団協事務局長「空から死」声明に憤りも

(被団協)の事務局長・田中照日さん(84)は、埼玉県新座市)は会場の平和公園に向かう途中、5月に広島を訪れたオバマ米大統領の声明を思い起こしていた。

「雨や雪が降ってきたよ」

命や肉親を奪われた人々の無念を晴らしたい一心で、運動に身をささげてきた。

「被爆者からは、オバマ氏の訪問を喜ぶ声も謝罪しなかったことへの不満も聞いた。エフロスさんは「オバマ氏を取り組む核軍縮が進むよう、被爆者の思いを伝えていく」と誓った。

被爆者からは、オバマ氏の訪問を喜ぶ声も謝罪しなかったことへの不満も聞いた。エフロスさんは「オバマ氏を取り組む核軍縮が進むよう、被爆者の思いを伝えていく」と誓った。

△71年前の朝、空から死が降ってきた、世界は変わってしまった」

13歳の時、長崎の爆心地から3・2キロの自宅で被爆した。3日後に入った爆心地付近では伯母やいとこが黒くけになり、計5人の親族を失った。一瞬で自らの

「犠牲者の思いを代弁してきた者として、あの表現を許すわけにはいかない」

共運動する被爆者からは「この大統領も来なかったのに、オバマさんは来てくれたじゃない」となだめられた。田上富久市長や安倍首相も式典で、オバマ氏の広島訪問を評価した。憤りが消えない一方、「声明は平和を願う多くの人の心に届いた」とも実感する。

だからこそ、核兵器廃絶を目指す仲間として事実を真正面から向き合ってほしい。オバマさんには被爆者の生の声を耳を傾け、廃絶の具体策を打ち出しても

田中さんは、この一文で始まる声明を目の前で聞いていた。その翌日、全文を読んで憤りを覚えた。

「オバマさんには被爆者の生の声を耳を傾け、廃絶の具体策を打ち出しても

小学校の頃から原爆投下が戦争終結を早めたと学んだ。しかし、初めて広島と長崎を訪れて被爆者の体験を聞き、「原爆投下は誤りだった」と気付かされた。

被爆者からは、オバマ氏の訪問を喜ぶ声も謝罪しなかったことへの不満も聞いた。エフロスさんは「オバマ氏を取り組む核軍縮が進むよう、被爆者の思いを伝えていく」と誓った。

被爆者からは、オバマ氏の訪問を喜ぶ声も謝罪しなかったことへの不満も聞いた。エフロスさんは「オバマ氏を取り組む核軍縮が進むよう、被爆者の思いを伝えていく」と誓った。



被爆者の思いを伝えていくことを誓うジェイク・エフロスさん(9日午前)

海越え日中 韓米平和結ぼう

「お互いの国の主張や歴史を理解するために話し合い、東アジアの平和につなげていこう」と取り組む若者たちがいます。米国の大学で学ぶ日中韓米の学生たちです。

2014.5.18 赤坂・日曜版
A11-12



記念して植えた木の前に並ぶ「P. E. A. C. E.」の役員。代表を務めた清邊さん（前列右から2人目）、新代表のジョンさん（後列左から2人目）＝写真は同団体提供

歴史と向き合う学生たち in USA

米国の首都ワシントンにあるアメリカン大学。その一室で4月、「ヒロシマ」をテーマにした演劇が行われました。

「ヒロシマ：人間が初めて原子爆弾を経験したところ」「ヒロシマ：私を見失わせた」。同大学の留学生らが、第2次世界大戦末期の原爆投下を軸に、順番に英語で一人芝居を行い、原爆被害者やその家族の境遇を演じました。

この演劇では、原爆被害

自国を愛するからこそ



日本軍「慰安婦」問題についてグループに分かれて意見を交流する学生たち＝3月28日（洞口昇幸撮影）

書とともに、当時米国で差別されていた日系米国人や、日本軍「慰安婦」の実相を知り苦悩する日本兵、深く傷ついた元日本軍「慰安婦」の女性の苦しみなども訴えました。

「米国では、ヒロシマ」という歴史的な大きなイベントと教えられる。それだけじゃないと強く感じた。そう語るのは演劇を見た、韓国系米国人の大学生ジェイコブ・ファンさん（18）。

「演劇が伝えるようにさまざまな側面を理解し、対話することが平和のために大事ですね」

企画したのは同大学の学生団体「P. E. A. C. E.」(ピース)。正式名は「ピース・オブ・イースト・アジア・イン・クリエティブ・エンゲージメント」(ピースは、英語の頭文字からとった略称です。名前は「創造的な関わりのおかげで東アジアの平和の流れ

や家族、知人が選んだ人たちが動かされている。結局、私たちの問題じゃないかと」

結成後、留学生や日韓の両親を持つ在米学生が自身の生い立ちと平和への思いを発表したり、日本軍「慰安婦」問題について議論する企画を開いてきました。

毎回、参加者が自分と国籍や生まれ育った国が違う相手と話ができるようにグループを分け、交流の時間もつくっています。大学の中で、歴史や政治問題を話す学生同士のつながりもできました。

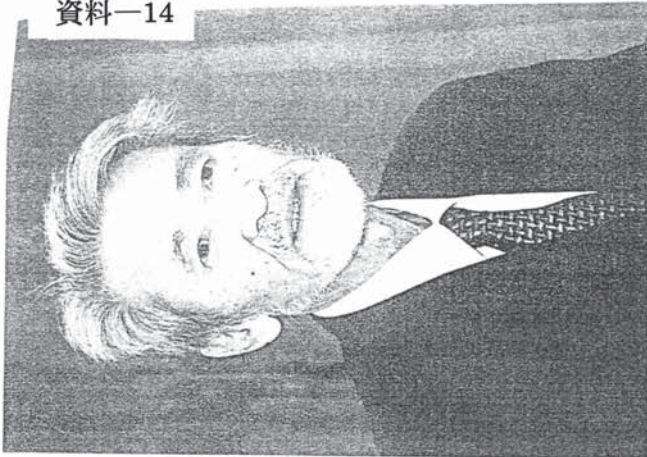
清邊さんは5月に留米を終えます。

「歴史を変え、情報を統制する安倍首相が『愛国書』とも言われているが、私は日本を愛しているからこそ、歴史に向き合い平和を築きたいと思うのです。日本に戻った後も自分ができることは何か考え、学びたい」

(新代表)には清邊さんと同じ年で、韓国と米国の国籍を持つタンニエル・ジョンさんがなりました。初めはうまくいくか不安がありました。しかし、活動を通じて「日本人たちも韓国人に攻撃的な人ばかりではない」と考えるようになり、今は活動に大きな可能性を感じています。

今後は、他の大学の留学生らに向けても活動を広げたいと語るジョンさん。「自分たちの国に帰ったら平和のために行動する学生を、もっと増やしたい」

日本の戦争責任問う資料館理事長
高実 康稔さん
77歳
4月7日死去



調査や講演を終えた後、夜遅くに妻と焼酎をたしなむのが日課だった高実康稔さん。お別れの会には韓国や中国からも弔電が寄せられた＝2007年ごろ（岡まさはる記念長崎平和資料館提供）

肩と腕のあまりの細さに、スーツが大きく見えた。友人たちの評は「人を變うことを知らない偉男」。普段は口数も少ないが、戦争における日本の加害責任の話になると、多弁になり言葉に熱がこもる。

朝鮮人被爆者や端島炭坑（通称・軍艦島）などで働かされた中国人らの記録を展示する「岡まさはる記念長崎平和資料館」理事長。市民の手で集められた資料を大切に、端島が世界遺産として登録された2015年夏に訪れた際、一つずつ丁寧に説明してくれた。

約45年前に被爆朝鮮人の実態調査に取り組んだ牧師岡正浩さんと出会い、理念に共鳴。「運の尽きといつか、幸運といつか」。朝鮮人被爆者が健康管理手当を取得できるよう、10以上の裁判を支援。岡さんが1994年に亡くなり、設立の中心となった記念の資料館は翌年に完成。退職金25万円はそこにつき込んだ。自らを「小心者」と称し

私財投じ被爆朝鮮人ら支援

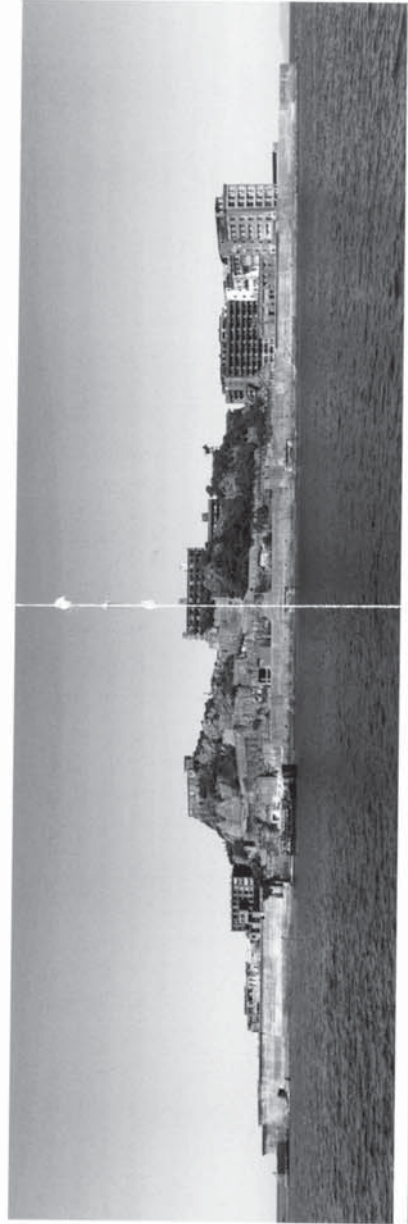
た。「右翼が押し掛けるのでは」と、竹島がテーマの討論会の開催をしぶつたことも。だが、一度やると決めたことは、最後まで諦めなかった。

中国人強制連行問題の調査で、10回以上現地に。交渉を重ね、昨年、企業側と被害者団体の歴史的和解にこぎつけた。共に調査に当たった平野伸人さん（70）は「弱さを見せられる、人間らしい魅力があった」。周りに多くの仲間が集まった。

「平和を守るために、歴史と真摯に向き合おう」。日本の加害責任を追及する際の舌鋒（ぜつぽう）は鋭いが、専門は真話「星の王子さま」で知られるサンテグジュペリの研究者。第2次世界大戦の体験がにじんだ作品を追及した。

酒の席でたまに口ずさむのはシャンソン。「そういえば、フランス文学の先生でしたね」。本職を思い出した仲間と、笑いに笑いつづけた。

（共同通信 武田爽佳）



竹島＝軍艦島

「東京新聞」刊



核兵器禁止条約の制定を求める「ヒバクシャ国際署名」への賛同を呼びかける谷口稔さん（右から2人目）＝2017年3月21日、長崎市

大やけど 非核への覚悟

谷口さん 被団協関係者ら悼む

ワント（朝日シタ刊）

長崎の原爆で背中一面に大やけどを負いながら、命の限り核兵器廃絶を訴え続けた谷口稔さん（88）が30日、亡くなった。国内外で常に核廃絶運動の先頭に立ってきた被爆者の一人。その志を知る人たちは、谷口さんが願った「核なき世界」の実現を誓った。

▼1面参照

29日夕、長崎原爆被災者協議会（被災協）の横山照子副会長（76）と柿田富美枝事務局長（63）は谷口さんを病院に見舞った。ベッドに横たわった状態だったが、穏やかな表情で目を開け、意識ははっきりとしていたという。

横山さんは、被災協会長の谷口さんと50年以上ともに活動してきた。「核兵器禁止条約が実効性のあるものになるためには、彼の方が必要だった」と話し、「『自分の背中が核廃絶に必要ななら、どこでも脱ぐよ』と強い覚悟をもとにが

んはってこられた」。

原爆写真の収集・調査に長年携わり、今月9日の長崎市の平和祈念式典で、被爆者代表として「平和への誓い」を読み上げた深堀好敏さん（88）は谷口さんと同い年。「同志がひとり亡くなった」と惜しんだ。

「自分は1回死んだ。生きているのが不思議」と谷口さんから聞いたという深堀さん。「第一線で活動していた被爆者がだんだん少なくなってきた。もう少し自分もがんばらな」と話した。

広島県に二つある県原爆被害者団体協議会のうち、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）にオブザーバー参加する県被団協の佐久間邦彦理事長（79）は「声にならない。残った被爆者の責任が重大だと、改めて痛感する」と、死を惜しんだ。

「谷口さんを始め、被爆者が海外に出て行って実態を語ることで、核兵器禁止条約ができた」とその功績を振り返った。日本被団協顧問の岩佐幹

三さん（88）は千葉県船橋市。IIは「大変な運命を背負って生きてきた方。核なき世界を目指す人々の道標のよう存在だった。『苦勞様でした、あなたに続きがほしい』と伝えます」と伝えたい」と話した。

戦争を知る世代がまた一人亡くなり、「谷口さんが追い求めた平和な世界を実現するため、私たちも歩みを止めることなく、心に響く活動を続けていきたい」と誓った。

谷口さんは近年、入退院を繰り返しつつも精力的に活動していた。今年1月には、大阪で講演。3月に入院する数日前には、核兵器廃絶を求める署名活動のた

め、街頭にも出ていた。核兵器禁止条約が国連で採択された7月には、病床から「一日でも早く、核兵器をなくす努力をしてもらいたい」とビデオメッセージで訴えた。

昨年、オバマ米大統領が現職の米大統領として初めて被爆地・広島を訪れた際、谷口さんは広島に招待された被爆者の1人だったが、体調不良で出席を断念。入院先の長崎市内の病院のテレビでオバマ氏の演説を見守った。コメントを出し、「広島に来てくれたのはうれしく思うが、核兵器廃絶への力強さは感じられなかった」と残念がった。

土山秀夫さん死去

元長崎大学長 核廃絶運動を主導

長崎の核廃絶・平和運動を理論的に主導した元長崎大学長の土山秀夫（つちやま・ひでお）さんが2日午前5時16分、多臓器不全のため長崎市内の病院で死去した。92歳だった。葬儀は近親者のみで執り行う。

長崎市出身。長崎に原爆が投下された翌日、市内に戻り入市被爆した。長崎医科大学（現長崎大医学部）の救護班に加わり、救護にあたる傍ら、爆心地近くに住んでいた兄の遺体を捜し出した。



戦後、長崎大医学部長などを経て、88～92年に同大学長。退任後は被爆者、医師として、核兵器廃絶運動

のリーダー的存在になった。「感性と理性の両方に訴えかける必要がある」と、核兵器禁止条約や北東アジアの非核地帯の創設な

どを提唱し続けた。

長崎市平和宣言文起草委員や「世界平和アピール七人委員会」委員、「核兵器廃絶地球市民集会ナガサキ」実行委員長などを歴任

「理論的支柱担った」

「核兵器廃絶をめざすヒロシマの会」共同代表の森滝春子さん（78）は、1990年代半ばから、土山さんと東京でロビー活動をするなど行動を共にしてきた。土山さんが実行委員長を務め、行政と一緒に開いてきた「地球市民集会ナガサキ」でも分科会を受け持った。「被爆体験に基づく使命感がしっかりとあった人。長崎に土山さんがいると思うだけで力をもらえた」

2011年に朝日新聞紙

した。長崎大核兵器廃絶研究センター（RECNA）の創設にも尽力。15年に公開された映画「母と暮せば」（山田洋次監督）では、主人公のモデルとなった。

上で対談をした元広島市長の平岡敬さん（89）は95年、米アメリカン大で開かれた原爆展にともに参加した。「学者としての立ち位置から、国際情勢を的確に分析する方だった。激することなく温厚な物言い、長崎の反核運動の理論的支柱を担った」と話した。

長崎では、「赤い背中」の写真で知られた被爆者で日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）代表委員の谷口稜暉さんが8月30日

に亡くなった矢先。平和運動の代表的存在を失った被爆者らの悲しみは深い。「谷口さんを送り出したばかりなのに」。長崎原爆被災者協議会副会長の横山照子さん（76）は肩を落とした。長崎の被爆2世で平和活動支援センター（長崎市）所長の平野伸人さん（70）は、長崎の平和運動では谷口さんが「エンジン」、土山さんが「羅針盤」だったと言う。「理を尽くして理路整然と、大きな視点で核廃絶を訴えた。先生にしかできないポジションだった」。

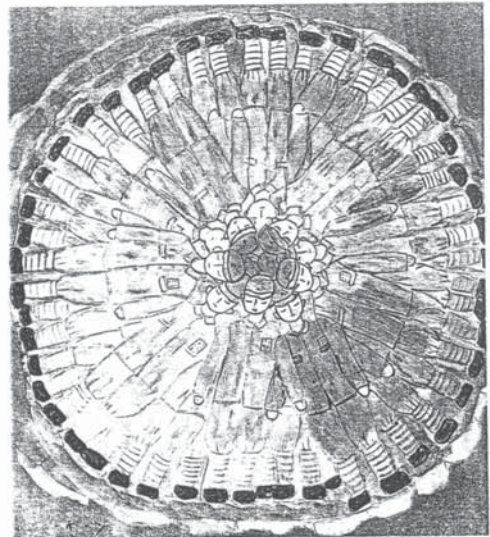
「まさに精神的支柱」。30年以上、運動をともにしてきた長崎県平和運動センター被爆者連絡協議会議長の川野浩一さん（77）はそう評し、悼んだ。「土山先生に叱られないようにがんばっていいと思います」

Peace Pilgrims “Sunflower Compact” (draft)

Aug.2, 2017 K y o t o

23th Pilgrims since 1995

- 1) Peace Pilgrims Community named “Sunflower” had been founded successfully by a democratic rule. Therefore 23th community also should be settled and be governed by a strictly democratic rule.
- 2) We have been encouraged by William Perry, then US Secretary of Defence’ s address at Pervomaysk Missile Base of Ukraine in June 4, 1996 , saying “ let us plant more sunflower on the former missile silos to give peace a chance to all the kids on earth.” At the same time, we must remember the petal of sunflower- like dead bodies of school boys, which were found in Hiroshima Red Cross Hospital on Aug. 6 1945.
- 3) Establishment of the Peace Pilgrim Common Fund:
 - a. Equality rule : one citizen , one vote.
 - b. 10 ,000 Yen per a citizen.
 - c. Purpose of the fund: inner city traffic , entrance fee, flowers and gift to Hibakusya , as well as welcome party and farewell party.
 - d. Collected and controlled by student coordinators
 - e. Audited and settled in the wrap-up session of the final day of Aug.10.
- 4) 3 groups , which are composed of the community of 42 citizens
 - A. 4 Faculties: Peter Kuznick (AU), Atsushi Fujioka (090-9995-3137, RU) , Kyoko Cross(RU), Koko Tanimoto Kondo
 - B. 5 Student Coordinators
 - C.. 33 Students: 9 from AU, 21 from Ritsumeikan U, and 3 from APU.
- 5) We appreciate generous assistance and subsidy provided by Ritsumeikan University, for honorarium to lecturers, meeting room charges, as well as various payments to student coordinators and interpreters.



THE END

核廃絶願い継いで

広島市は毎年8月、立命館大（京都市）と米国アメリカン大（AU）の学生らが広島、長崎を訪ねるプログラムの講師を務めてきた。1995年に始まり延べ700人以上が参加したプログラムだが、立命館大の担当教員が任期満了になるため今年で終了する。AUの卒業生でもある近藤さんは「若い世代が核廃絶の願いを広げてほしい」との思いを込め、2日に若者たちと合流する。（14、15面に特集）

2017 夏 ヒバクシャ

2017.8.2

「日米交流の原爆探求の旅」という題のプログラムは戦後50年を機に有志による自主企画として始まり、97年から両大学の正式科目になった。学生らは京都で立命館大国際平和ミュージアムの見学などをした後、広島や長崎の式典に参加し、被爆者の証言を聞いてきた。今年は10日の日程で日米の学生約40人が参加する。生後8カ月のとき、広

日米の学生に20年 思い伝え



日米の若者に核廃絶の願いを伝える近藤紘子さん
—貝塚太一撮影

こんどう・こうこ 1944年11月、広島市生まれ。爆心地から1・1kmの自宅で被爆。国内外で核廃絶を訴え、国際養子縁組の活動にも取り組む。

近藤紘子さん（72）

すぐに立命館大に問い 会い意気投合した。「日米の若者に核廃絶の願いを伝える大切な機会」を。97年から講師として

て両親や自身の経験を語るとともに、被爆者が救助を求めて集まった川岸や遺骨を埋葬した供養塔などを案内し「自分の目で見て、感じたことをみんなに伝えて」と訴えてきた。参加者の中にはNGO職員や大学の研究者になった学生もいると聞き、「草の根で被爆者の思いを伝えてほしい」と期待する。

立命館大側の担当を務めてきた藤岡惇特任教授が来年度から非常勤となる見通しで、プログラムは今年が最後になる。AU側には終了を惜しむ声があり、藤岡さんは「他大学とも協力するなどして、学生同士が平和を考える取り組みは続けた」と語る。

近藤さんは「昨年は米国のオバマ前大統領が広島に来たが、プログラムが始まった20年前なら米国世論が認めなかったと思う。私たちの訴えは米国社会に届いている」と言う。プログラムは一区切りになるが、これから日米の若い世代に声を届け続けるつもりだ。

【田辺佑介】

被爆者に寄り添うように

1683 AM (朝日新聞)

核といのちを考える

シェア 広島・長崎

2

米活動家の志次世代に

米大統領選が続く7月14日、太陽が輝く西海岸シアトルのピースパーク。右手に折り鶴を掲げる被爆少女・佐々木禎子の銅像前に、ゆかりの米国人が集まり、思い出話に花を咲かせた。この公園や像をつくった米の平和運動家フロイド・シュモー(1895~2011)。「ヒロシマに原爆が落ちたとき、あなたと私の上にも、そして未来の子どもの上にも落ちたので」。そんな思想に立ち、



フロイド・シュモー

被爆地に手を差し伸べた。終戦4年後の1949年、家をなくした被爆者のため、広島市内4カ所に住宅や集会所など15棟21戸を建設。51~60年には、長崎市にも家を建てた。それらの活動が評価され、88年に谷本清・平和賞を受賞。賞金を元手に90年、ピースパークができた。



公園に集まった中で最高齢の白人女性ジーン・ウォーキンショー(90)。51年に大学を出て、「広島の家」



①サダコ像の前に集まったジーン・ウォーキンショーさん(左)、デブラ・ドーソンさん(左から3人目)ら=7月14日、米シアトル、岡本玄撮影
②シュモーの写真を整理する「シュモーに学ぶ会」メンバーたち=7月22日、広島市中区、岡本玄撮影

プロジェクトに参加した。シュモーから「行かないか」と誘われ、「もちろん」と即答。3カ月で家と集会所を1棟ずつ建てた。「罪のない人々の上に、原爆が落とされたことが悲しくて。その気持ちを行動で表したかったです」。



街が消えた広島。家のない人がたくさんいた。滞在し、シュモーは言った。「市民と同じ生活を送り、寄り添うように」。移

動は自転車。豊や懐のある和風建築にこだわった。ウォーキンショーは最若手メンバーだった。「シュモーは若い私に広島の惨状を見せて、次の世代に伝えてほしいと願ったのかもしれない」。

つ。2012年、市民らの力で資料館「シュモーハウス」に生まれ変わった。デブラは昨年4月、広島を初めて訪ね、見学した。アルバムと同じ写真が展示され、母の足跡が残っていると知って涙を流した。

オバマ大統領の広島訪問が取り沙汰された今年4月、シュモーハウスへの訪問を求める手紙をホワイトハウスへ送った。「人は国や人種を超え、助け合えることを知ってほしくて」。



デブラたちを広島で迎えた市民団体「シュモーに学ぶ会」代表の今田洋子(72)。「1歳の時に母に背負われ、広島市の爆心地近くに入ってしまった。03年、ピースパークのサダコ像の右腕が切断される事件が起きた。それがきっかけで市民団体を立ち上げた。シュモーにまつわる資

料を集め、その功績を伝える活動を続けてきた。原爆投下をめぐって、シュモーはこんな言葉も残した。「言葉にならないほどの犯罪に對し、すべての人が責任をシェア(共有)する必要があります」。

「たとえ一人でも、できることはある。シュモーの精神が、それを教えてくれています」

(岡本玄)

立場超えとともに理想

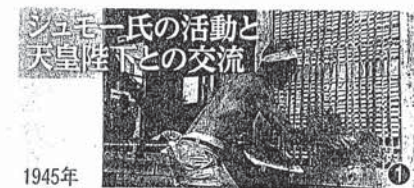
皇室書簡「米の禎子像 平和の象徴に」

皇室と米国の学者との「平和交流」——。昨年、米シアトルのワシントン大で確認された書簡15通のうち10通は、天皇陛下の意向を踏まえ、侍従らが森林学者だったフロイド・シュモー氏に送ったものだった。陛下は皇太子時代の1949年と88年、日本の復興や平和運動に尽くしたシュモー氏と直接面会していた。

陛下、シュモー氏と面会

硬球ボール（野球用）一冊
皇太子殿下へ献上せられましなから
御前へ差上げました茲に申し進めます
昭和二十五年 七月十七日
フロイド・シュモー 殿
東宮大夫 野村 行
皇太子時代の天皇陛下に、シュモー氏が野球ボールを献上したことを示す書簡＝米ワシントン大図書館所蔵

1949年 7月	「あなた方のような善良な人々による継続的な努力のおかげで、ゆっくりではありますが、確実に世界の平和が戻りつつあると知ることは、陛下の大きな喜びの源です」 （三谷隆信侍従長）
10月	「皇太子殿下（現天皇陛下）は、あなたが先週の水曜日、小金井までいらっしやうとご厚意への感謝だけでなく、もっとも誠実な感謝の気持ちを伝えるよう切望されています」 （小泉信三・東宮御教育常時参与）
50年 12月	「親切なメモとすてきなボールの贈り物を受け取り、皇太子殿下はとても喜んでおられます」 （清水二郎・東宮傳育官）
89年 5月	「天皇陛下は（昭和天皇の逝去に際しお悔やみの書簡を送った）あなたの心遣いに感謝されており、よろしく伝えるようおっしゃられました」 （西園寺公友侍従）
90年 4月	「天皇、皇后両陛下はあなたの長期間の努力が、禎子像に象徴されるシアトルピースパークの形でまもなく実を結ぶことを喜ばれています」「みなさま方の精力的な努力に深い感謝を表しておられます」 （楠本祐一侍従）



シュモー氏の活動と天皇陛下との交流

- 1945年
8月6日 米軍が広島に原爆を投下
- 49年
8～10月 シュモー氏が被爆者向けの復興住宅を広島に建設①。その後、皇太子さま（現天皇陛下）と東京で面会
- 82年4月 勲四等瑞宝章を受章
- 84年 広島市の招待で平和記念式典に出席
8月6日
- 88年11月 反核・平和に貢献した個人・団体に贈られる「谷本清平和賞」を受賞。東宮御所で皇太子ご夫妻と面会
- 89年1月 昭和天皇逝去。皇太子さまが天皇に即位
- 90年8月 谷本清平和賞の賞金や寄付を元手に、被爆少女の銅像などがあるピースパークを米シアトルに建設

- 2001年4月 シュモー氏が105歳で死去
- 12年11月 シュモー氏らが建てた住宅21戸のうち現存する集会所が広島市の平和記念資料館「シュモーハウス」として開館②



「朝日新聞」
2017年

1度目の面会は、シュモー氏が被爆者向けの復興住宅建設のために来日した49年10月。皇太子だった天皇陛下が東京・小金井に滞在時、シュモー氏が訪れる形で実現した。陛下はシュモー氏が持参したスキー映画と一緒に鑑賞し、広島での活動について説明を受けた。小泉信三・東宮御教育常時参与らが面談後、シュモ

ー氏に礼状を書いていた。「皇太子殿下は（住宅を建設した）あなたの2カ月間にわたる崇高かつ実用的な活動に深く感銘しておられます」「殿下の国際的な友情への確信がますます育まれますよう望んでいます」シュモー氏は翌50年、再び広島を訪れ、復興住宅建設を再開。同7月にはこの間の活動を書簡で報告し、野球ボールをプレゼントとして贈った。清水二郎・東宮傳育官は同年末、ボールへの礼状と書簡を送った。

「世界平和のためにあなたが日本でされている素晴らしい仕事への感謝を込めクリスマスと新年のお祝いを申し上げます」（殿下は）ボールを学習院大に持って行かれ、学習院チームにプレゼントされました」手紙の往来は続いた。昭和

「両陛下は戦後、この国の社会福祉の促進にあなたが貢献されたことをよく覚えておられます」「禎子像とシアトルピースパーク

和末期の88年11月、反核・平和に貢献した人や団体に贈られる「谷本清平和賞」の受賞が決まり、シュモー氏が広島を訪れた際には、東宮御所に招かれ再び面会。一緒に御所の庭を散策するなど、もてなしを受けた。

シュモー氏が米市民らから寄付を募り、90年にシアトル市内に造った平和公園には、被爆後に亡くなるまで病床で折り鶴を作り続けた佐々木禎子さんの銅像も建てられた。楠本祐一侍従が同4月20日付で出した書簡には、天皇、皇后両陛下がシュモー氏の長年にわたる社会福祉や平和への貢献をねぎらう言葉がつけられていた。

確認された最後の書簡は94年3月7日付。シュモー氏が現皇太子さまに、終戦50年の95年に合わせて米國を訪ねるようお願いした内容だった。実現しなかったが、シュモー氏が晩年まで日米の平和交流を望んでいたことがわかる。

が、世界平和と、すべての人々の友好の象徴として役立つことを両陛下は強く望まれています」

シュモー氏の功績を伝える活動をする市民団体「シュモーに学ぶ会」（広島市）の今田洋子代表（73）は、確認された書簡について「皇室と親交があったと聞いていましたが、具体的なやり取りが分かり、驚きました。地位や国籍を超えて、ともに手を携えることが平和の原点だと教えられました」と話す。（岡本志



放影研の丹羽太貫理事長

「被爆者調査すれども治療せず」
放影研「申し訳ない」
理事長、式典の文書に

原爆による放射線の人体への影響を調べている日米共同運営の研究機関「放影研」の丹羽太貫理事長は19日、設立70周年の記念式典で、「調査すれども治療せず」と被爆者から批判を受けて

いたことを踏まえ、「心苦しく残念」と述べたうえで、「大変申し訳なく思う」との考えを文書で示した。放影研は1947年設立の原爆傷害調査委員会（ABCC）が前身。当初は米軍の医師が研究を担い、被

爆者の意に反して検査をする事例が明らかにするなど、「モルモット扱い」との批判があった。丹羽理事長は19日のあいさつで「設立当初は多くの批判があったことも事実で、ABCCの後を継ぐ者

として大変重く受け止め、心苦しく残念に思っております」と語った。一方で、示したあいさつ文も内容はほぼ同じで、「大変申し訳なく思っております」と記した。丹羽理事長は報道陣に「過去を振り向いて、とんでもないことだったということを、我々がきちんと認識して言わざるを得ない」と思いを語った。

放影研は「申し訳なく思う」の言葉を95年に作成した見学案内で使っている。今回は式典という公の場で

放射線影響研究所

原爆による放射線の人体への影響を調べるため、米原子力委員会の資金で米国学士院が1947年に設立した原爆傷害調査委員会（ABCC）が前身。後継機関として75年に日米両国政府が共同出資で設立した。広島と長崎にあり、日米の研究者らでつくる評議員会が運営や管理をしている。

「こうした言葉を使った。この日参加した広島県原爆被害者団体協議会の坪井直理事長（92）は、ABCCについて「検査はやるが治療はしないと言われたが、被爆者は何とか助けてもらおうとした」と振り返った。もう一つの県被団協の佐久間邦彦理事長（72）は「ABCCと放影研を切り分けるのはありえない。明確な謝罪がほしかった」と語った。（宮崎園子、久保田侑暉）

広島の不死鳥 もう一度海へ

水爆実験きっかけ 反核訴え航海のヨット



在りし日のフェニックス
号=大宮利信さん提供



バーバラ・レイノルズさん(前列左から3人目)と家族、乗組員たち。バーバラさんが手にした浮輪には「広島鳳凰(ほうおう)丸」とある=ワールド・フレンドシップ・センター提供

退役軍人ら 米で引き揚げ計画

「フェニックス・オブ・ヒロシマ(広島の不死鳥)」。そう名付けられた木造ヨットが米カリフォルニア州の川に沈んでいる。米国人の平和運動家、故バーバラ・レイノルズさん(1915〜90)らが反核を訴えて航海した船だ。ヨットを引き揚げて再び平和を訴える航海に使う。そんなプロジェクトが始動した。

フェニックス号は、バーバラさんの当時の夫で放射線影響研究所の前身・米国原爆傷害調査委員会(ABCC)の研究者として広島に来ていた故アーノルド・レイノルズ博士が設計。長さ約15メートル、30メートルの帆船で、広島造船工場の手では1954年に完成した。

同じ年、3年の任期を終えた43歳の博士は、39歳のバーバラさんと10代の子ども2人、日本人乗組員3人とで、世界一周のため日本を出港。異文化に触れながら米国に戻るのどかな船旅をするつもりだった。

禁止区域へ突入

ところが、3年半をかけてインドやアフリカ、中南米を巡った後の58年、寄港先のハワイで一変。現地で「ゴールデン・ルール号」というヨットが話題になっていた。マニラ諸島での米国の水爆実験を阻止するため、航行が禁じられた区域へ突入。乗組員が逮捕されて裁判中だった。その

反核への思いを継ぐことを決めた博士は、家族を乗せたままフェニックス号で同様に航行禁止区域に突入。博士もやはり逮捕された。その後保釈されて、いったん広島に寄港したが、61年、今度はソ連(当時)の核実験に抗議し、再び航海に。ベトナム戦争が始まると、博士は医療品を積んで北ベトナムへも向かった。

70年に米国に戻った博士は平和学研究の大学教授になり、98年に87歳で他界した。一方、バーバラさんは65年、広島市に市民団体「ワールド・フレンドシップ・センター」を設立。広島に住みながら、被爆者が海外で証言する旅を企画したり、核実験に抗議してハンガーストライキをしたりした。90年に74歳で亡くなるまで、インドシナ難民の救援活動などを続け、生涯を平和運動に捧げた。

20年航海へ準備

フェニックス号とゴールデン号はいずれも所有者が

かわり、川や湾に係留中にそれぞれ沈んだ。フェニックス号は、カリフォルニア州北部のサクラメント近くの水深約8メートルの川底にある。

米国の退役軍人らでつくる平和団体「ベテランズ・フォー・ピース(VFP)」(本部・米ミズーリ州、約3千人)は、ゴールデン号を引き揚げ、寄付を募るなどして約4400万円を集め、5年かけて修復。2020年に核兵器廃絶を訴えながら広島へと航海する準備を進めている。

さらに、フェニックス号の引き揚げも計画。「動くモニュメント」として、両艇そろっての航海を目標に寄付を呼びかけている。

VFPのヘレン・ジャックカードさん(62)は「被爆75年となる20年に、二つの船がともに広島を訪れることができればと話している。詳細はプロジェクトのホームページ(<https://phenixofhiroshi.jp>)」。

フェニックス号とゴールデン号はいずれも所有者が

被爆体験の語り部 山岡ミチコ

略歴



1930年3月24日 広島市中区竹屋町にて生まれる。

1945年8月6日 進徳女学校3年生（15歳）学徒動員で働いていた電話局に向かう途中、爆心地より800メートルの路上で被爆。瓦礫の下に埋もれているところを、探しにきた母親に助けられる。

1955年 25人の原爆乙女（Hiroshima Maiden）の一人として渡米。アメリカ人クエーカーの家庭にホームステイをしながら、ニューヨーク市のマウント・サイナイ病院にて、一年半に渡ってケロイドの治療を受ける。



1958年 広島市内の土井田洋裁専門学校で洋裁を教え始める。その後流川幼稚園の保母として働く。

1979年 母・アキノさんの死をきっかけに、被爆体験を語り始める。以後、戦争の愚かさ、命の大切さを若い世代に語り継ぐため、国内外で被爆体験の証言活動を行ってきた。ワールド・フレンドシップ・センターへ関わり始める。

1995年4月 被爆50年の春、米国ワシントンDCの私立シドウェル・フレンズ学園に「平和スピーカー」として招かれ、被爆体験を語る。

1996年2月 フランス、パリの原爆展にて被爆体験を語る。

2002年11月 カナダ、オタワの原爆展にて、被爆体験を語る。

2003年7月 幾多の苦難を乗り越えて、自らの体験を語り継ぐ人に贈られる「第一回 人類の声賞」をアメリカのニューヨークにて受賞する。

2005年4月 長年に渡る被爆証言活動の功績により広島市市政功労表彰を受賞する。

2006年8月 脳梗塞で倒れ、療養生活に入る。一度は証言活動に復帰したが、また療養生活に専念する。

2013年2月2日 広島市内のホームで、肺炎のため82歳で逝去する。

山岡ミチコさんは、広島での被爆体験の証言活動を続けてきた一人である。当時、山岡さんは15歳で、進徳高等女学校の3年生。動員学徒として電話局に向かう途中、爆心地から800mで被爆。母親に助けられたが、腕や顔に大火傷を負い、頭髮が抜け、血便が出て死を覚悟した。母親の懸命の看護で一命は取り留めたが、15歳の少女の顔は赤黒いケロイドで盛り上がった。戦地から戻った婚約者は驚き、嘆き、そして去った。広島流川教会の谷本清牧師や、米国のジャーナリスト、ノーマン・カズンズ達、日米の市民の支援で実現した渡米治療に参加する。1955年5月から約1年半、ニューヨークのマウント・サイナイ病院で治療を受け、合計27回の手術を受けた。治療に参加した女性には「ヒロシマ・メイドゥン」（原爆乙女）と呼ばれ、全米に被爆の実態を知らしめた。帰国後は洋裁の仕事などをして暮らした。被爆体験を語り始めたのは母親が亡くなった1979年、49歳の時だった。米国やフランス、カナダなど海外にも出向いて、命と平和の尊さを訴えた。生涯独身だったが、子供が大好きだった。証言を聞く子供たちに「自分で考え、行動できる人にな리なさい」と語り続けた。2006年8月6日の平和記念式典後、脳梗塞で倒れた。命が危険な状態だったが、リハビリを続け、翌年には病院の食堂で、米国から来た若者に被爆体験を語った。その後介護施設での療養が続いたが、2013年2月2日、肺炎のため天国に召された。



オスロで10日、ノーベル平和賞の授賞式で講演するサーロー節子さん＝林敏行撮影

「サーローさん、勇気ある」 大学時代の友人

授賞式で講演をしたサーロー節子さんは13歳で被爆後、大学時代までを広島で過ごした。

70年近くにわたり親交のある広島女学院大学（広島市東区）時代の友人、岡田和子さん（86）は広島市西区に10日夜、インターネッ

トでサーローさんの講演を聴いた。

岡田さんは、大学時代から仲良しグループの一員。通っていた広島流川教会（同市中区）の日曜学校で一緒に子どもたちに英語を教える活動をした。米国に留学中の谷本清牧師（故人）から、広島を訪れるインド人の案内役を頼まれた



岡田和子さん

「朝日」朝刊

際、インドの貧困や差別の問題について知り、「何とかしなきゃ」と熱く語っていたサーローさんの姿が強く印象に残っている。

思ったことを必死でやる勇気のある人だった。「外国でも意見をしっかりと言い、強く生きる姿は彼女らしい」。それが岡田さんから見たサーローさんだ。

あるとき、海外で証言活動を続けるサーローさんから、電話で相談を受けた。

「原爆で何万人が死んだと言っても伝わらない。だから個人の名前を書こうと思うの」

女学院では、330人以上の生徒や教職員が原爆で亡くなった。その名を書き連ねた横断幕を使って証言するようにになった。数字では原爆のむごさは伝わらない。その思いは、10日の講演にも表れていた。「一人ひとりには名前がありました。一人ひとりが、誰かに愛されていた。彼らの死を無駄にしてはなりません」多くの人の思いを背負い、車いすで授賞式会場に現れた友人。「堂々としていて、すてきで」



広島女学院高校の人々と 縮景園 前にて

努力結実 亡き友思い涙

平和賞授賞式出席、被団協・田中さん



ノーベル平和賞授賞式で、目を閉じて演説に聞き入る被団協の田中照巳代表委員(中央)＝10日、オスロ(共同)

日本原水爆被害者団体協議会(被団協)の田中照巳代表委員(85)は、ノルウェー・オスロで10日開かれたノーベル平和賞授賞式の間、何度も目を閉じた。「亡くなった何十人もの仲間の顔が目に浮かんだ。あなたたちの努力が実を結んだよ、僕らはもっと頑張ります、そう思ったら涙がボロボロ出た」。被爆者を代表して出席した式典後、そう振り返った。

田中さんは13歳の時、長崎で被爆。1970年代、長く暮らした仙台市で被爆者運動にのめり込んだ。自分が証言するよりも、裏方として仲間の証言の場を用意するのが好きだった。

一緒に世界中を回り、被爆体験を伝えた被爆者はその後、ほとんど世を去った。2015年の核拡散防止条約(NPT)再検討会議では、自らが被爆者を

代表し、演説をした。平和賞を受賞した「核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)」は、07年設立の若い組織。10月の受賞決定直後は「半世紀以上運動したわれわれも、同時受賞に値したのでは」とわだかまりもあった。だが、オスロに入り、その思いは吹っ飛んだという。「ICANは核兵器をなくしたい全ての人のものだと感じた」。

活動半世紀超「核の真実、語り続ける」



非政府組織(NGO)「核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)」にノーベル平和賞が贈られたことに、核兵器の恐ろしさを訴え続けてきた被爆者たちは世界へ声を届けられたと喜んだ。一方、核保有国や日本などが核兵器禁止条約に参加していない現状を踏まえ「これから活動が重要だ」と力を込める。

「世界中の仲間が受賞したようなうれしさだ」。広島原爆で

授賞式前日には、ICAN主催の集会に参加し「核兵器にすがっている人々に、絶対使ってはならないと、心と魂で受け止めさせる運動をICANと達成したい」と呼び掛けた。「被爆者は力のある限り、自分たちが体験した真実を語り続ける」。

そう締めくくると若者の姿が目立つ会場から大きな拍手が起きた。(オスロ共同)

被爆者「これからが重要」

(「京都新聞」朝) 2017.12.12

12歳だった姉を亡くし、自身も放射線の影響で貧血症状に苦しんでいた岡田恵美子さん(80)は、広島市で喜びをかみしめた。

授賞式が開かれたノルウェー・オスロでのパブリックビューイングで式典を見守った熊本市の成田豊太郎さん(88)は長崎の爆心地から約1・2キロの地点で被爆。「若者の集まりであるICANがまとめ、核兵器禁止条約の採択につなげてくれた」と感慨深げ。

長崎市の山田一美さん(84)は、授賞式で「核兵器禁止条約を核兵器の終わりの始まりにしよう」と呼び掛けたカナタ在住の被爆者サロー節子さん(89)の演説に「実現するにはこれからの活動が重要だ」と話した。

オスロで行われたパブリックビューイングで、ノーベル平和賞授賞式を見守り拍手する被爆者ら＝10日(共同)



▲オスロのノーベル平和センターでの展示の様子

▲2005年に設立されたノーベル平和センター
横断幕には今回のセンターの展示タイトル「BAN THE BOMB」の文字

2017年度のノーベル平和賞受賞者は、ICAN(核兵器廃絶国際キャンペーン)です。核兵器廃絶に向け世界中に働きかけ、国連での「核兵器禁止条約」採択に貢献した活動が評価されて受賞に
いたりました。これを記念して、ICANの活動を紹介する展覧会が、現在、オスロにあるノーベル平和センターで開催されています。展覧会には、広島平和記念資料館、長崎原爆資料館の被爆資料とともに、国際平和ミュージアムの所蔵資料が展示されています。ミュージアムより展示貸出中の資料「弁当箱」は、広島県立広島工業学校1年生 生田裕壮

▲当館に貸出資料の引き取りに訪れたノーベル平和センター展示責任者
副センター長のリブ・アストリッド・スベルドラップさん(中央)

▲広島平和記念資料館(左)と長崎原爆資料館(右下)当館からの貸出資料(右上)



▲ノーベル平和センターを訪れた子供たち

写真協力: Yahoo! ニュース 個人 館 南樹 (Asaki Abumi)

国際平和ミュージアムの資料 ノーベル平和センター(ノルウェー)にて展示中!

(いくたゆうそう)さんのものです。1945年8月6日、裕壮さんは、動員学徒として建物疎開の作業に当たっていた中島新町(爆心地から約700m)で被爆しました。この場所で被爆した180名を越す生徒は遺体から個人を判別することが難しく、遺骨を手にするのができない遺族も多数いました。原爆が投下された日、帰ってこない息子を心配して、裕壮さんの両親ハジメさん、ハツエさんも、作業していた中島新町へ裕壮さんを探しにでかけました。見つけることができたのは、朝、ハツエさんがつめたおかずが焼けて残っていたこのお弁当箱だけでした。

丸木美術館が谷本清平和賞受賞

公益財団法人ヒロシマ・ピース・センター(広島市佐伯区、鶴衛理事長)が主宰する第29回谷本清平和賞に、原爆の図丸木美術館が選ばれました。美術館活動を通じ、国内外へ核兵器廃絶と恒久平和の実現を発信し続けている点が評価されたとのことでした。

同賞は被爆者支援に尽くした広島流川教会の故谷本

清牧師の遺志を継ぎ、1987年に創設。過去には俳優の吉永小百合さんや漫画家の中沢啓治さん、映画監督の新藤兼人さんらが受賞しています。

広島工業大学広島校舎で行われた授賞式には、丸木美術館から職員3名が出席し、賞状、副賞、花束を頂きました。



授賞式後の懇親会にて、左から職員の山口和彦、田中実花子、岡村幸宣

谷本清平和賞受賞スピーチ抄録

丸木美術館は、開館五〇周年という節目を迎えました。企業や行政の支援もなく、美術館を支えたいという人たちが集まって、その思いを守り、伝え、つなぎ続けてきたことは、奇跡のようなことだと思っています。

私たちの仕事は、命を直接救うことではありません。訪れる方々に「原爆の図」を見て頂くため、いつも美術館を開けるというのが、一番大切な仕事です。受賞が決まったとき、現場の職員全員で、広島に来たいと考えました。今日は、三人全員が来ています。ボランティアの方々が、美術館を守ってくださっているおかげです。

「原爆の図」は、わかりやすいメッセージを発するだけの絵ではありません。絵を見る人の数だけ、それぞれ異なる「原爆の図」があります。

原爆を体験された方が観る「原爆の図」は、私が観るのはまったく違います。米国展には、九四歳の元米兵も訪れました。彼が観た「原爆の図」も、まったく違ったでしょう。芸術家が観れば、細部の美しさに目が行くでしょうし、命を宿した母親、震災を経験した人、みんな異なる「原爆の図」を観ています。内戦の国から来た若者は、絵から音が聞こえると言いました。

おそらく、芸術とはそういうものなのだと思います。それぞれが、自分の背景と照らし合わせながら、絵と自分をつないでいく。結局、私はそうしたときに、ただそばにいて、いっしょに絵を観ることしかできません。

近年、「平和」という言葉が、他者と自分との間に線を引いて、「自分たちの命を守る」という意味で使われがちであることを心配しています。丸木夫妻の作品を手がかりに学び、考えてきたのは、命と命の間に線を引かない、ということです。

もちろん、自分の命は大切な宝です。しかし同時に、究極的には決して解りあえないかもしれない他人の命も、大切な宝だということを忘れて

はいけない。国や民族、宗教、哲学、文化、言葉などの違いによって、命の重さが変わるわけではありません。

戦争だけでなく、いつの時代においても、私たちの社会には、理不尽な暴力、不均衡が生まれてきます。目に見える、わかりやすい暴力だけでなく、目に見えない社会的な不均衡、差別や偏見もあります。そうした暴力に最初に気づくのは、直接痛みを受ける人たちです。逆に最後まで気がつかないのは、不均衡の恩恵を受け、無意識に加担する側にいる人たちでしょう。それは、もしかしたら「平和」を語っている私たち自身であるかもしれないと、自戒を込めて考えます。

今年は、核兵器禁止条約が締結され、核兵器廃絶国際キャンペーン(I CAN)がノーベル平和賞を受賞した、画期的な意味を持つ年になりました。そうした人類史的なスケールの問題を見つめると同時に、現代を生きる若者にとつて、もしかすると「戦時中」であるかもしれない生きにくい時代に、「原爆の図」がくじけそうな心を支えて、明日も希望をもって生きてみようと思ってもらえるような、すぐ目の前にあるかけがえのない命を救うことのできるような、そんな絵画であって欲しいと心から願っています。

(岡村幸宣・丸木美術館学芸員)

場所	日程	主な活動内容
今年度の セミナー実施内容	1日	結団式、オリエンテーション
	2日	近藤絃子さんら被爆者による講演
	3日	原爆投下や敗戦についてのセミナー
	4日	原爆ドーム・広島平和記念資料館
広島	5日	シュモールハウス、放射線影響研究所
	6日	式典への参列、灯籠流し
長崎	7日	爆心地公園・長崎原爆資料館
	8日	平和首長会議の総会参加
	9日	式典への参列、日本被団協との交流
	10日	振り返り、解団式

米国のスミソニアン航空宇宙博物館の原爆展が中止された1995年、アメリカン大の留学生だった被爆2世の直野章子さん（現・広島市立大教授）が「米国人の意識を変えたい」と呼びかけたのがきっかけ。平和と学に力を入れる立命大の教授だった藤岡惇さんに協力を依頼し、自主企画とし



2017.8.30

（島） 日米の大学生らが原爆忌に合わせて広島と長崎を訪問して被爆の実相を学ぶ、アメリカン大と立命館大のセミナーが今夏、一区切りを迎えた。1995年に始まり、計23回延べ約800人の若者らが原爆の歴史を学んできたが、セミナーの見直しなどで来年度から休止になる。関係者たちからは「育った平和の芽が失われないように、少しでも長く続けてほしい」と、継続を望む声が上がっている。（山上高弘）

アメリカン大と立命大共同セミナー休止

被爆実相学ぶ場 継続を



セミナーで、折り鶴を折る学生たち（京都市で）＝藤岡さん提供

核の恐怖「今だからこそ」

で始まった。2年間の試行期間を経て、97年に立命大の正規科目に認定。2011年に東日本大震災の被災地・福島の大震災や、13年に米映画監督のオリバー・ストーン氏も参加するなどし、輪が広がっていった。しかし、藤岡さんが今年度で引率ができる特任教授の任期を終えるのに加え、立命大もセミナーの見直しを始めていたことから、来年度以降の休止が決定。立命大によると、20年度に平和学習を目的にしたセミナーの再設置を目指すという。

最後となった今年は8月1日に京都で始まり、学生たちは被爆者の近藤絃子さんの話を聞くなどした。4日に広島に移動し、広島平和記念資料館の見学のほか、6日は平和記念式典に参列したり、原爆ドーム前の元安川に灯籠を浮かべたりした。

アメリカン大からは継続を希望する声が多く、藤岡さんは「国際情勢が不安定な今だからこそ、核兵器の恐ろしさについて考えなくてはならない。完全になくすのではなく、何らかの形で来年も続けられるように努力したい」としている。

05年初参加・米研究者 灯籠流しに涙 平和活動決意

私たちが核兵器が使用されるのを阻止する責任を負っています。核戦力の増強を主張するトランプ氏が大統領になった今だからこそ、このようなセミナーは重要なのです。学生たちを連れて、再び広島・長崎を方々へと回ります。

多くの米国の学生は原爆のことも、それがなぜ使われたのかも知りません。私は学生にいかに関わった投下決定がなされたかや、それが人間にどんな影響を与えたかを授業で触れることにしています。学生たちの多くは感情的になり、中には泣いてしまう学生もいます。それでも自分も何かしたいといけなと思い始め、注意を払うようになります。抽象的だったことが自分の関心事に変わるのです。

今でも覚えているのは原爆忌の6日夜。原爆ドーム前での灯籠流しの際に罪悪感を感じ、思わず泣いてしまいました。すると、近藤絃子さんに「二度と同じことが起きないように、あなたには伝えていく責任がある」と声をかけられました。目の膜が取り払われたようで、自分の一生を核兵器廃絶にさげようと思ったのです。

参加する前は多くの米国人と同じで核兵器に対して抽象的な考えしかありませんでした。賛同こそしていませんでしたが、当時は核は研究対象ではなく、平和活動もしていませんでした。

2005年に初めて参加し、現在は核問題の研究者として自らの学生たちに原爆がもたらした惨劇などを語り継いでいる、米モンテゴメリー大准教授のウインセント・イントンディさん（42）にセミナーから学んだことなどを聞いた。



セミナーの意義などについて語るイントンディさん（米ワシントンDCで）

